

THE SEISHIN

大正五年十月十日印刷
大正五年十月十三日發行

按
神

第 五 號

祖山學院同窓會發行

THE ZEIMIN

時報

第五卷

元覽會同親學山縣

大正十四年四月十日
五月五日
六月十日
七月十五日
八月二十日
九月二十五日
十月三十日
十一月五日
十二月十日



次

目



宗 躰 決 疑 抄(承前)……………	中山日祐上人(1)
教時機國抄大綱……………	泉 義 敬(6)
聖祖の國家觀……………	黑 簾 勇(10)
我……………	藤 田 鷹 風(12)
入 妙 の 直 路……………	在 庵 生(15)
吾人は如何に生くべきか……………	森 亮 遠(17)
語……………	猪 口 海 靜(20)
生 活 と 趣 味……………	望 月 嘯 月(23)
鷹 峯 印 象 記……………	露……………
頼 む べ き ば……………	松 木 秀 月(26)
如何にせば意義ある生活をなし得るか……………	望 月 本 啓(28)
宗祖の御銅像を拜して……………	小林 峯 月(31)
聖祖の御傳記を拜讀して……………	中 村 義 明(32)
吾祖の御威徳……………	井 上 惠 妙(38)

報 恩 謝 徳……………	渡 邊 泰 深(39)
我は本化の門下なり……………	江 原 一 夫(40)
人 生 と 勞 働……………	辻 蘆 洲(42)
延 山 の 春 曉……………	柳 緒 生(43)
本院内諸堂案内記……………	山 内 慧 戒(45)
本化妙宗の信行……………	赤 島 潮 旭(47)
辿 り し 路……………	宮 南(49)
同窓會記事……………	(50)
講演部記事……………	(50)
文學部記事……………	(52)
運動部記事……………	(52)
修學旅行記事……………	(52)
飯 井 野 御 牧……………	吉 田 素 恩(57)



●

[illegible]

棲神

第五號

大正五年十月十三日發行

宗躰決疑抄

【承前】

中山祐師作

一、於此命終即往安樂世界事。

此文者次上安樂阿彌陀佛等云々安樂世界者即觀經所說三輩九品ノ淨土ト聞ク既ニ其阿彌陀佛ト何ゾ各別ナラン哉
或人難ジテ云法華信受之輩者爲_ル即身成佛ヲ於所期ト如說修行ノ之女人何ゾ可_キ往ニ生ス安樂世界ニ哉隨テ決ノ二ニ
云ノ菩薩學ニ法花ニ具ニ足ス二種ノ行一ニ者有相ノ行二ニ者無相ノ行ナリ無相安樂行ハ甚深妙禪定ニシテ觀ニ察ス六情根
有相安樂行ハ此レ依ニ勸發品ニ散心ニ誦ニ法華ニ不ニ入禪三昧ニ坐立行一心ニ念ニ法華ノ文字ニ行若シ成就セバ者即見_ル

普賢ノ身ニ 法華修行ノ人ヲ如レ此ノ釋シ給ヘリ 仍テ如說修行ノ人ハ奉レ見ニ普賢ノ身ニ事ヲ爲ニ本意ト何ゾ依テ法華修行之力ニ可レ生ニ安樂世界ニ哉若シ如ニ今ノ經文ニ者唱ニ彌陀ノ名號ニ往ニ生スト安養世界ニ說ク何ゾ虛說ナラン乎以レ之ヲ安樂即往都卒天上ノ文即往忉利天上ノ文遠ニ即見普賢身釋ニ並ニ若有聞法者無一不成佛ノ文如何

答云文毎ニ人彼レ難之處也但於今經ニ有ニ能開所開ノ事ヲ不レ辨御難也 若有女人聞是經典如說行ト者能開也今ノ經ノ正意也即往安樂世界以下ノ所開經等ノ意也茲ヲ以テ解釋記ニ若不論ニ能開之妙ヲ將ニ何ヲ以テ明ニ所開之處ニ等云々觀經等此死生彼レ說所開已テハ不レ可レ顯ニ直觀此土ノ義理ニ記十云若有女人等ト者此中只云ニ得聞是經如說修行一即淨土ノ因ハ不レ須ラ更ニ指ニ觀經等ニ也問ヲ如何ニ修行スル答ヲ既ニ云ニ如說修行一即依レ經ニ立行ス具ニハ如ニ分別功德品ニ中直觀此土四土具足故此佛身即三身也故ニ下ノ文都卒德品ニ其ノ例不同但在ニ機感ニ如說修行ト云フ指ニ分別功德品ニ經ニ云ク又見此娑婆世界乃至瑠璃爲地等ノ文是也娑婆世界瑠璃明鏡ノ之寶地ト見ル時ハ何ゾ不レ顯ニ即往安樂ノ義ニ可レ有哉隨テ直觀此土四土具足ノ釋不レ須更ニ指ニ觀經等ニ釋シ給ヘ今法華經修行ノ女人不レ可レ有ニ即往安樂ノ義ニ如ニ御難一邊ニ有相無相兩行具足セバ即見普賢身ナルベキ條勿論也不レ可レ有ニ無一不成佛疑ニ茲ヲ以テ六ノ卷ニハ我淨土不毀我此土安穩云々 本國土妙ノ顯後豈離伽耶別求常寂光ナルベシ 即往忉利天等ノ文爾前所開ノ文ヲ舉タル也修行法華住生淨土ノ大義不レ辨能開所開ノ學者ノ斷簡也

一、一稱南無佛皆已成佛道事。

或人難ジテ云 一稱南無佛ノ者已ニ成佛ス念佛修行ノ者何ゾ可レ漏ニ此内ニ哉而忽以念佛行ノ者ニ可レ爲ニ墮罪ニ之由被レ仰セ候事大ニ不審候凡ソ開會ノ時ハ惡即善也何ゾ念佛ノ行人可レ墮ニ惡道ニ哉法華ノ意五逆謗法ノ惡人スラ尙成佛ス況ヤ唱ニ彌陀ノ名號ニ人依ニ何事ニ爲ニ墮罪業ニ哉不審候云々

答云如レ前能開所開之法門也 一稱南無佛ト者所開也皆已成佛道ト者能開也爾前四十餘年之間一ヒ唱ニ佛名ノ者今經ニ皆成佛スベキ也於ニ當教ニ爰ニ一稱南無佛ノ者成佛ストハ不レ可レ得レ意就類種ノ開會之時低頭舉手ノ小善

成^ル佛因^ト談^ス也。人天戒五戒十善等不^レ來^ニ至^セ法華^ニ之程^ハ徒^ニ朽失^ス也。而^ニ會^{シテ}衆善小行^ヲ歸^ス廣大一乘^ニ之時^ハ眞善妙^ノ當鉢也。爰^ラ以^テ記^ス五^ニ云縱^ニ有^ル宿善如^ニ恒河沙^ノ終^ニ無^シ自^ラ成^ス菩提^ノ之理^ハ等^テ云過去^ノ宿善^ハ如^ニ恒河沙^ノ不^レ值^ニ法^ノ知^ニ識^ニ之理^ハ宿善不^レ生奉^ニ值^ニ之後^ニ成^ス菩提^ノ之理^ハ也。一經^ノ中^ニ所詮^ス不^レ過能開所開^ニ也。如^レ此義理^ニ迷^ヒ學^ス者^ノ中^ニ一稱南無佛^ト云^テ念佛可^ニ申^ス云^ハ事^ハ大謬義也。

一、法既本妙。麤由物情^ニ並^ニ但除其執不除其法事^ニ。此^ハ文意^ハ爾前四十餘年^ノ諸經^ハ皆是^ニ妙^{ナリ}麤法^ハ執情^ノ方也。開會云時其情計開其法不^ニ開會^ニ見^セ念佛眞言等^モ於^ニ本妙^ノ者申^ニ念佛^ニ有^ニ何^ノ失^ニ哉^ハ有^ニ何^ノ故^ニ念佛^ハ可^ニ墮^キ罪^{ナル}業^ニ哉能^ク可^ク候^{云々}。

答云此難甚^タ以^テ不^レ被^レ得^レ意候^於法^ニ有^ニ二^ノ筋^一。一^ハ所說^ノ法鉢^ニ能^レ被^レ教法也。一^ハ所說^ノ法鉢^ト者十界^ノ依正^ノ二法^ニ是也。此則有佛無佛性相常然^ニ三千性相^ニ疑然常住^{ナル}處法^ニ既^ニ本妙^也二^ニ能^レ被^レ教法^ト者始^メ華嚴^ニ至^ニ涅槃^ニ悉^ニ能^レ被^レ教法也。而^ニ爾前四十餘年^ノ之間隨他^ノ法^ニ不^レ顯^レ說^ニ十界三千^ノ性相^ニ此^レ則併^テ依^ニ麤^ノ由物情也。調^ニ機根^ヲ於^ニ一圓^ニ候^ニ森羅萬像^ニ悉^ニ本有^ノ常住^ノ之妙理也。此則理自覆本^ノ時^{ナル}今經^ハ如來^ノ隨自意^ニ已證甚深^ノ妙法^ニ是也。次^ニ至^ニ但除其執不除其法^ノ難^ニ者不^レ除^ニ其法^ハ申^ス法^ハ以前^ノ所說^ノ法鉢^ノ法^ト能^レ被^レ教法^ノ下^ニ二^ノ筋^一何^ノ法^ヲ其法^ト者所說法鉢也。努々念佛眞言等^ノ法^ト不^レ可^レ得^レ意。次^ニ除^ニ執法^ノ情^ヲ不^レ除^ニ教法^ニ云^フ事大^ニ師所判^ラ不^レ辨疑難也。天台大師玄九云廢三顯一^ト者此^ハ正廢^ニ教^ヲ雖^モ破^レ其情^ヲ若^シ不^ニ廢教^ニ樹想還^テ生^ス執^ヲ教^ヲ生^ス惑^ヲ是故^ニ廢^ニ教^ヲ等^{云々}經^ニ云^フ正直捨方便^ニ但說^ニ無上道^ニ云^々此則教情共^ニ破^ス明文也。當家^ノ明鏡也。能々可^レ有^ニ思案^ニ者歟。穴賢^{々々}。

一、諸論各異。端修行理無二偏執。有是非達者無異諍事。

佛法^ハ八萬^ニ分^ニ宗^々修行^ノ人^ハ自^ハ是^ニ他^ニ非^トイフ事^ハ是^ニ偏執^ノ時事也。達者^ノ前^ニ無^ニ異論^ニ云^フ眞言等與^ニ法華經^ト各別也。云^フ偏執^ノ時事也。達者^ノ前^ニ爾前與^ニ法華^ニ無^ニ差別^ニ云^ハ如何可^レ得^レ意候。

答云此事當世學者迷惑之處也凡四教各有四門空門亦空門非有非空門也四教所詮理云時三藏教眞諦法性ノ理ヲ所詮トス通教以テ如此ノ別教ハ三諦ノ理歷別不融三諦也至圓教者四門共ニ悉實相一如妙理也如此於四教所詮一理各四門亦具處ヲ不辨一代聖教所詮一理同申事大謬也其故於三藏教雖有四門不同所入之理但眞諦法性ノ一理也於此一理入自自門入自空門如此雖有不同所入之理但眞諦法性一理也通教別教圓教以如此四教四門所詮一理天地遙異也不知此等修業無二云四教五時ノ教門ヲ混亂事大謬也今法華者於前三教前四味不可混亂超八醍醐妙法也大師ノ釋能々可存知者也爰以傳教大師守護章ニハ三乘同座スレバ理ハ一往似眞一再往ハ皆虛妄ナリ等云々止二云不識義執着邪見等是名人身牛云々文句五云彼會ノ絕待之唯一ハ此外更ニ無法ノ昔ノ待二之唯一ハ此外更有法一、名同而跡異ナリ云々此等ノ文能々可爲思案者也念佛禪戒等ノ法門ト法華一致ト云事不辨此等解釋一曲會私情ノ斷簡ナル事也返々諦法ノ各難通候也穴賢々々可愼者々々々

一、三重教相次第委細可注給之候。

答云ク三重教相ト者一根情融不融、相ニ化導ノ始終ノ始終不相終、相三師弟遠近不遠近、相是也於第一ノ教相ニ華嚴阿含方等般若法華涅槃各有得道談雖然於與奪傍正ノ義爾前各有得道許方ハ初後佛慧圓頓義齊是也奪時ハ但以帶方便不帶方便是也二化導ノ始終不相終、相者於第一ノ教相許各有得道之處ヲ打破三千塵點劫昔ノ乃至二百佛所等聞法華實大乘之處云前四味前三麤ノ教座席過去之實相毒發スル故入如來慧聞不待時ノ法花得道全四味三教當分得分ハ非奪スル處第二番教相ノ所詮ナル故弘三云今日ノ聲聞具禁戒者良由久遠初業聞常若昔不聞小告不具況復大耶等云々玄十ノ五味ノ義毒發ノ釋可知シ三師弟遠近不遠近、相者第一華嚴寂場爲元始第二三千塵點大通覆稱爲元始今第一第二打破五百塵點劫元始定論ニ種熟脫ノ壽量一品ノ所詮可是茲以解釋玄七云但觀

池月不識天月等云々

今日伽耶近成ノ如來三十ノ成道如來ハ有名無實也經論ノ釋ノ文追テ可ニ注シ申ス候凡ソ於本迹ノ異ハ諸人迷惑事也能々可レ有御得意事也云々

一、囑累品以後被說隨他法門云事。

法華一部八卷廿八品者皆是釋尊出世ノ之本懷隨自意內証ノ法門也記ノ一ニ云品々之内咸ツ具ニ鉢等フ句々ノ之下通^モ結^スニ妙名^ヲ釋給^フ隨他ノ法門^ト者衆生迷惑情佛說給法門也一部之内何^レ被^シ說隨他ノ法門^ヲ哉此事不審^ニ候

答^テ云ク於^ニ此經^ニ玄收付囑結要付囑三摩付囑^トテ三ノ付囑有^レ之玄收付囑^ト者寶塔品ノ誰能於此以下ノ文是^レ也結要付囑^ト者神力品爾時佛告上行ノ以下ノ文是^レ也摩三付囑^ト者今經囑累品是^レ也如來一切所有之法名鉢宗用教^{ナルベシ}玆^ヲ以^テ文句十云解釋^{ニハ}大事功畢隨物遍好等云々如來內証ノ御本意^{ニハ}非^ス雖然^リ品々之内等^ト云テ一々ノ文句^ニ結^シニ待絶^ノ二妙^ニ名鉢宗用教ノ五重^ヲ云可^ニ具足^也隨他ノ法門^ト申^{セバ}テ鉢外方便ノ隨他^ノ法門^トハ不^レ可得^レ意於^ニ本迹二門^ニ有^ニ序正流通^ノ三段^ニ於^ニ此^ノ三段^ニ各可^キ有^ニ傍正^ニ在世滅後^ノ也然^ル處^ニ大師自解佛乘ノ所判^ヲ以^テ簡別給^フナルベシ努々於^ニ一部八卷^ニ不^レ可^レ爲^ス爾前帶權ノ之思^ヲ者也



教機時國抄大綱

上 序 論 泉 義 敬

現流の我が宗祖御遺文を二大別して、佐前佐後とし、從て其の教義異れるが故に、或は佐前とし或は佐後の法門とす。即ち三澤抄には、佐前をば佛の爾前經と思召せと而して佐後をば宗祖内證眞實の法とす。今本抄を拜讀せんとするに當り、正しく佐前外用に當るこの抄が、其の内容たるや先づ如何なる手段の御下に御化道遊ばされしやを尋ね、又本抄の結構及び其の所顯の教義の様子を伺ひ、序で本抄に顯はされたる所破部面に於る彼等の主張に對し宗祖の御判釋、又本宗の教學上如何ある位置及び性質に當れるかを知り、尙本抄所顯の教理が何れに基て如何ある有様を呈するやを考へ、進んで同じ佐前の御書中最も注目すべき彼の十法界事の如き、其の教理の進方より從て顯はれる權實本迹等の關係を述べ、次いで本抄が意趣奈

邊に存するやを、即ち諸先哲の言を引いて述べんとす。

一、祖書中に於ける本抄の位置

(一)御遺述の年次

聖祖の教義及び意趣を識得せんとするに當り、本抄御製作の年次を明かにせざる可からず、而るに今此の御書は其の御著述の年次を欠くが故に、古來の先師先聖異說紛々として概論すべからず、今且く諸師の説時を舉げて之れを批判せん。

(二)健抄祖書大意等は、(一)元庚申三年と云ひ、(三)和語式は弘長元年——文永元年、(三)啓蒙は弘長元年——文應元年、(四)境妙目錄は康元元年比——と、

(五)日諦目錄年譜遺文錄等は弘長二年とす。如斯諸師其說を異にし統計に難し、然りと雖今諸說を考ふるに、和語式の外悉く其當を得ず、獨り和語式のみは弘長に始めて遠く文永に亘ると云ふ、是れ實の意を得たる物か、然れば今は和語所明の年次に從て本抄御製作年次を佐前弘長の比より文永の始めに置く可然と欲す。

(二) 本抄の主張に就いて

本抄は題號已に教機時國と云ふて、即ち五綱中の四を擧げて入文は正しく五綱を明す、而して釋迦如來一代の佛教中法華を以て餘經を對決す。故に此れを性質上分類せば教判たること分明なり。而るに教判中大小權實、或は本迹及び觀心等あり。今本抄は何れに屬するやと云ふに、五綱は本吾祖弘通の上に於て法華と正像所弘の教法とを論せし者也。本抄は遠く宗祖内證の實義に依て立論すと雖本書中未だ其の本旨を述べ給はず、唯昔權今實に約して五綱を述べ給へば自ら權實判の御書ある事明らかなり。されば且らく之は在世中の教相に約すと雖も、正しく滅後諸教諸宗を論するなり。即ち本抄は主として宗祖御在世中の淨土禪等の成立的宗旨を破して所依の教法をば破し給はず、其れ已に權實判を論すれば廢權立實の勢自然あり。故に本抄は約教宗にして折伏の氣勢ありたること誰か疑はん。而して法華の五義相應あることを顯

はすの第一義あり。

(三) 佐前佐後法義異相の概要

宗祖御一代化道三十年を二大別して佐前佐後とあす。即ち佐前に在ては能弘の導師本地を秘藏して發述せず、故に所弘の法体も自然に本佛の本法なる事を顯さず、故に佐前に在ては人法俱に未顯未開なる事を知ぬべし。

佐後に至るや之に反し、凡格の聖祖上人は忽ち靈格の聖人となり、即ち本化上行の再生日蓮とある。此處に於てか、所弘の法体も亦正に本化別付嘱の一大事の秘法絶待不可思議の妙法なる事始めて顯れるに至る。此故に聖祖示して云く『法門の事は佐渡の國に流され候ひし已前の法門は、只佛の爾前經と思召せ。』と、其れ如斯佐の前後の法門雲泥の相違あること知るべきなり。尙御妙判を引て其の異相を示さば、文永八年寺泊御書に勸持品の恐怖惡世中の文を指示して曰く『日蓮八十萬億の菩薩の代官として之れを申す。』と、而して佐後最初の御書たる富木入道殿御返事に前文を指示し

て曰く『去る十月十日附せられ候ひし入道寺泊を上り歸て候ひしとき、法門を書き顯はし候き、推量仕らん、已に眼前あり、佛滅後二千二百餘年乃至天台傳教は略ぼ釋し給へども、之れを弘め殘せる一大事の秘法を此の國に始めて弘む、日蓮豈其人に候はずや。』と、其れ此の兩抄御著作の時期僅かに三句を隔つるのみ。而るに前書は迹化の代官を以てし、後書は同文を指示するに直に聖祖御自身本化の立場を以てし給ふ。即後の書に『天台傳教乃至其人に候はずや。』と、宣べ給ふが如き是れ實に本化上行の菩薩ある事を明示し給へるの聖文に非ずや。蓋し聖祖佐前に於ては、天台は順にして、或は稱するに天台の門人と云ひ又根本大師門人等と云ふ、之等は本地を奥藏し給ふに外ならず。要するにこの兩書相去る僅近なりと雖も、實に法門上に取て雲泥の差違を生せしめたり。抑其所具の法体本化上行傳の妙法五字に就ては佐前後相異なる事なし。而も其の題目の功能に至ては、所破の念佛真言淨土等の諸宗の法に於て、淺深勝劣あれ

ば其の所立の法体に於て隱顯容與無きを得んや。故に聖祖佐前に於て唱題の功德を示すに、但信無解は惡趣を免がるも出離甚だ難しと仰せらる。或は但信往生は以て得べくも、即身成佛は之れ難しと、故に未だ全く唱題即身成佛の妙旨を顯示し給はず、而れども一度佐後其の本地を顯發し給ふに於ては、長く迹化の域内を脱し、其功德を述ぶるに題目に於ける智愚の如何を問はず、教ゆるに但信受持の速身成佛を以てし、示すに本門の三大秘法を以てし給ふ。蓋し之れ佐前題目に於ける賢愚を撰び但信往生勸解成佛を説き給ふと其間大なる差別を存する事明かなり。

又佐前の化導は教相を専らとし、佐後の弘通は觀心を主とする也。聖祖佐前に於ては全く教相を以て弘通の主眼となし給ふ。蓋し能觀の題目は素より佐前已に宗旨建立の砌りに提唱し給へりと雖も、如何せん所觀の本尊は未だ全く顯示し給はず、即所觀の本尊顯はれざるが故に、能觀の題目も未だ全能觀の効を發揮成就する事を得ず、即ち能所

未分の題目とも云ふべきなり。而して未分の題目は以て小乘權教に對す、故に聖祖も亦佐前に在ては、只囑累總付天台所弘の意に準じ、未だ以て本化別頭の大法を開闡し給はず。而して佐前觀心の法門或は漏す處ありと雖も、之れ佐前弘通の正意に非ず。佐後に於ては全く觀心正意を以て弘教の主點とし給ふ、即ち本尊抄の如き其送狀にも觀心の法門少々之を註すと宣ふ。其他當體義抄の如き御義口傳日向記の如き、皆是れ觀心の法を示すものなり。而らば佐後に於ては全く教相を論ぜざるかと云ふに、然らず、佐後大いに教相を論ず、然のみならず其の教相も亦佐後に至らざれば完全せず。蓋し佐後の教相は觀心が家の教相あり、故に佐前又觀心の法門之無きと云ふに非ずと雖も、其は教相が家の觀心にして、佐後亦教相を論ずと雖も其は觀心が家の教相ありと知るべきなり。

(四)正しく本抄の位置及性質を結す

本抄は其の性質正しく約教判に在りて、宗祖教機時國序(内容)を以て釋迦如來一代の佛教を法華

經と餘經とに分類して判釋す。而して本抄の教相部類に屬することは明らかなり。而るに大小權實本迹觀心の教相中、五綱は法華と、正像所弘の諸經とを論ずる故に、此れを佛在世の説相に當つれば、佛の久遠の法華經を以て他の經を對決す。

如斯廣く具義に當つる時は、本迹權實其の意趣の奈邊に存するかを得るに苦しむと雖も、本抄中未だ本迹の起盡を明さず、又台家當家の相異る點を言はず、却て台家を我友とす。故に何ぞ破らん。又本抄遠く聖祖御内證の實義に依て立論し來ると雖も、未だ其の本旨を述べず、只昔權今實に約して五綱を論ず。故に本抄は權實判ある事明瞭あり。先に昔權今實と云ふは、且らく在世の教相に約すと雖も、此れを佐後に移して諸教諸宗を論破す。今本抄は主として宗祖が御在世中の諸教諸宗即ち禪真言淨土等を論ず。されば自然廢權立實の態度に出で、從て折伏的氣勢ありたる事誰か疑はん。以上の如く教相に權實を用ひ滅後末法に於ては淨禪等の成立的宗旨の權を破す。而して是れ所謂約

教宗的の折伏なるものなり。

聖祖の國家觀

黑 簀 學 勇

綱要刪略三、四三右 佐前未顯練實二意章云、蒙古ノ侵逼ハ全是地涌折伏示現之相也、其文本尊抄十
四五十右云、此四菩薩現ニ折伏ニ時成ニ賢王ニ誠ニ責愚
王ニ、行ニ攝受ニ時成ニ聖僧ニ弘ニ持正法ニ已上。

同三四四左 蒙古對治本化威力章云、恭ク以レハ高祖、
忠ニ于天下ニ也、草ニ創シ安國論ニ、中間ニ忍ニ衆難ニ
大ニ成ス蒙古對治ニ矣。

吾人は此の説に就て聊疑なき能はず、何となれば前文に本尊抄を引き、蒙古侵逼は、背正歸邪の日本謗國を誠責せんが爲に、諸天に命じ、隣國をして軍を起し、以て襲來せしめたりと云ひ、而して纔に一枚次下には、高祖の國家に忠たるや、蒙古對治を以て大成す云々とあり、之れ即ち前後矛盾せ

るが故あり、故に聊か卑懷を述べ、謹で識者の教示を仰がんと欲するものなり。

先之を述ぶるに當て、第一宗祖の國家觀、第二に攝受折伏の意義、第三吾人の卑懷此三方面よりす。

第一、宗祖の國家觀。

諸御書に依て一括して之を云へば、國家に對する御理想は、『報恩抄』に『日本乃至一閻浮提』と仰するが如く、此宇宙の眞理たる法華經、即ち妙法五字を以て、一閻浮提を統一せんとして、先大乘有緣の國にして、妙法五字と宗祖とは、必然的關係を有せる、我大日本帝國を中心とし、以て一閻浮提をして、妙法國に化せしめんとなり、故に宗祖は此眞理たる法華經を誹謗せる國は亡ぶも可なりとまで示し給へり。然れば即ち宗祖は國家の爲に法華經を弘るにあらず法華經の爲に國家を築き所謂妙法五字を以て建設せる大國土を御理想となし給へるは明なり。

第二、攝受折伏之意義。

煩文を却け略圖に顯せば、

攝受——攝取受用——大悲門——愛母

折伏——破折調伏——大悲門——嚴父

此の如く攝折は表裏して相離れず。宛も父母互に相離れず、車の双輪の如く、又今家破立一雙の如し。

第三、吾人の卑懷

先本尊抄に賢王となりて云々の文は、宗祖既に二十餘年已來、懇に國諫をなし給ふと雖も、信ぜざるのみか、反て迫害を加ふのみ、此に於て宗祖は大手段を施して、佛陀地涌に告げ、地涌をして蒙古の王とし、日本國の謗法を威嚇擁護したる佛陀の遠征軍あり、之を以て賢王の文に當て、而して身は身延にありと雖も、意業は大折伏にして、身業は聖僧の相を顯し給ひしなり、故に『成聖僧』の文は、攝受の相にして、宗祖の身業に約し、成賢王の文は折伏の相にして、宗祖の意業に約するなり、然り而して宗祖は不輕菩薩の後をつぎ、加之當面の使命役としては、末法通機下種結縁にあり故に折表攝裏あり、時に應じ機に應じては、又攝

表折裏ある邊あり、之れ即ち本獨特不思議自在のあす所あり。

次に剛略の説蒙古對治を以て、宗祖の忠を大成云々の文に至ては、吾人の斷じて取らざる所なり、何となれば先に一言したるが如く、宗祖は法華經を以て建設せる國家を御理想とあし給へばなり、故に剛略の宗祖の國家に忠たるは、安國論に草創し、乃至蒙古對治に大成云々の言は、誠に宗祖の國家觀を輕視せるものと云ふべし。

又蒙古對治は、果して宗祖にあるや否やは疑ふに餘地あり、即ち上來述べ來りしが如き、大理想を以て見るに、蒙古對治は宗祖の本旨にあらず、又國家が宗祖に歸正したるにもあらず、又謗法を覺醒せしにもあらず、尙現代宗門の情態より察するも、事實的に其證あし、故に『日蓮は不輕菩薩の後を追ふ、日蓮弟子檀那等は二陣三陣と勵み來るべしと命じ給へり。』故に三大秘法の妙旨の如く、法國冥合を以て宗祖の國家觀たる本旨とするが故あり、又縱令蒙古對治は、宗祖自ら事實的になし

給ふと云ふも、それは宗祖國忠の一端にして、大成にはあらざる也、次に又、歴史上に於て蒙古軍の亡びしにはあらずやと云はゞ、佛勅を蒙れる如來使なるが故に、蒙古の假面を被れる佛陀の遠征軍は、出沒自在あり、之れ即ち本化努力のなす所なり。

我

藤 田 鷲 風

我とは何ぞ、我とは、常、一、主宰を定義とす。即ち常住で、獨一体一で、其常住体一なる私の作用は、自由自在であつて絶待の權力を有す。

要するに、我とは其体は三世に旦り變易なき体の實在物で、其實在物には自由自在の作用ありと認めたるものに名つけたる語なり。

故に常、一、主宰、の常とは相に約し、一とは体に約し、主宰とは用に約したる定義からん。

常、一、主宰、を定義とする一切我を総合的に

三類に分解して解釋する事を得るなり。

三類とは、即ち即蘊の我、離蘊の我、非即非離蘊の我あり。

即蘊の我とは、此の身体を離れずして、常、一、主宰の實我ありと思ふ、即ち我とは物心積集の吾人の身體に即して實在すと思ふあり。

是れ一般世人の意嚮にして、此發端は唯吾人の身体が前後相續して恰も不生不滅にして、常住の如く思はれ、又吾人の身体を組織する物心の集合する事の緻密なる、恰も一個の實物あるが如く見へ、又身體の動作の不可思議なるに驚き、其結果身心を離れずして、常、一、主宰の實我ありと認むるに至るなり。

離蘊の我とは、吾人の身心の外に常、一主宰の我ありて身心を支配すと考ふ也。

此見解は、多く印度の外道學者の立つる所にし、其起原は、吾々に造業受果、轉生輪迴等のあるは、必ず一つの不滅恒存物に因る、然るに、前説の如き即蘊ならば、一定の壽命盡きて、身体滅

する時は、造業受果等も從つて存在する能はず、然らば我は身心に即して存在する物に非ず、吾人の身心を離れて存在せる故に、身體滅して灰土に歸すとも、造業に依つて受果し轉生し輪廻する也と考ふ。

非即非離蘊の我とは、前説の即蘊の如く、身心を離れざるにも非ず、離蘊の如く身心を離れて別存するにも非ず、一種不可説的なるを云ふあり。

此の説は、小乗佛教の所立にして、我若し即蘊からば、身己の身体を滅すると共に、我亦滅す、故に受果なし、又若し離蘊ならば我は自己の身体と共に滅する事なきも、身己即ち五蘊所造の善惡業によりて、五蘊以外の物が受果する事は、因果の法則にも反す、故に我は即蘊にも、離蘊にも非ず、一種不可説的實在に立つなりと云ふにあり。而して即蘊説は、經驗的に立ち、離蘊説は、推理的立場にして、第三非即非離蘊説は、思索的結果の立論なりと云ふべし。

各種外道所計の我は、各々外道學者その所説を異にすと雖も、多く前説の如く、離蘊的我論の範圍を出でざるもの也。

又一方面より此外道の輩が、常、一、主宰の實我ありと爲すを、無体隨情の我と云ふに對して、通常佛教に説く所の假我を、有体施設の我と云ふことあり。

佛教に於ては一般に我の名目を四種に分けり、即ち、

- 1、凡夫偏計の我
- 2、外道宗計の我
- 3、世俗に隨つて主客を分つ
- 4、法身の眞我

等あり。

苦、無常、無我の三法印は、通佛教のみ説くに外道は決して之を説かず。

此三法印を以て、諸法無我諸行無常涅槃寂靜を主張するに、自然外道の所立に依る我論を排斥せざるべからず。

之れ即ち俱舍、唯識、大論に我は假説と爲す所

以なり。

而して佛教にて排斥する我は、前述四種の中、凡夫徧計の我と、外道宗計の我とにして他の世俗に随つて主客を分つ我と法身の真我とは、佛教に於て認むるあり。

俱舍に云く、我も亦是の如く色受想行識の五蘊聚集せる上に假りに我の名を立つ

大論に云く、是の十六の神は十方三世佛及び諸の賢聖之れを求むるに不可得なり但だ憶想分別して強びて其名をなすのみ

斯の如く俱舍は假りに我を立つと云ひ、大論は求むるに不可得なり憶想分別の假名なりと云へり而して、ヤージユナヴルニヤは我の真相を問ふに及んでは『認識の主は認識し得べからず』と説き、如何ある定義を提出するも、『曰く非曰く非』を以て排斥せり。

到底言説の及ぶべき所にあらずと、一切の臆斷的定義を排斥せり。

常、一、主宰の定義に依る實我を排斥する斯の

如し。

然して佛教は、大小乗共之を破斥して、無我の道理を究明せり。

佛教に於ける、我の名目に、四種ありとは、既に擧げたる如く、凡夫徧計と、外道宗計の兩我は佛教より排斥し、代名詞の我と、法身の真我とは佛教に使用するなり。

法身の真我とは唯悟界の狀態を形容せるものにて、平等自在の作用を稱するにて所謂大我にてあるあり

哲學に依るも、認識所成我に至つて、我の本体即ち内界の純主觀にして、内證知覺の本体を説くと雖も、更に觀喜所成我を置き、我の最上地を示せり。

此觀喜は、人間の喜樂の幾億倍せりと、然らば正しく之れ法身の真我に相當せるならんか。

翻つて前二者、即ち凡夫徧計、外道宗計の兩我を見るに、其存在を許さば、所謂利己主義を助長し、社會の公德を尊重するの觀念を滅するに至る。

故に世人、特に佛教家たるものは、彼の命根を斷つに全力を傾注し世に献する處多大あるべきなり。

入妙の直路

在 庵 生

妙の字は若き女のもつれ髪

いふにいはれずさくにさかれず

と云ふ歌の如く、妙は矢張り妙、言語に絶して居る、何んと云ふたら、妙の字の解釋が出来やうか怎うしたら諸君に納得が出来るであらうか、水はなせ冷いか、湯はなせ熱いか、山はなせ高いか、海はなせ深いか、恁う云ふて来れば、何一つとして吾人に疑問の起らぬものは無い、實に不思議と云はふか、妙と云はふか、譯の分らぬ物である、而も亦少しも不思議な事もなければ、妙も事も無い、何んとあれば、水と云へば誰でも冷たい位の事は知て居る、湯と云へば熱いと思ふ、山と云へば高いもの、海と云へば深いもの、あたり前

のことである、少しも不思議ではない、けれども、其の定まつて居て、不思議でない所が、如何にも不思議であらん、實に妙だ！人は生れたら必ず死す、少しも不思議ではない、それでは、誰が生れたら必ず死すと云ふ事を定めたか、あせ必ず死ななければならんか、誰も定めた者でもなければ、死ななければならん云ふ規則も無い、けれども嫌でも好きでも死するから不思議だ、妙だ。何と云ふてもしかたが無い、是れが人間だけでは無い、總べて天地間の有りとあらゆるものは、皆斯くの如くである。宗祖は『小兒の乳を含んで、其味を知らずと云へども、自然に身を養ふ者婆が妙藥、誰か其方を辨せん、本瓜と稱して轉筋を療し、梅子と呼んで渴を止むるが如きに至ては、世間の淺事尙思議し難し』と宣ひし如くに、實に世間の事すら、吾々凡夫の眼から見たら、一として不思議あらざるは無い、けれども、此等は尙淺はかな事である、法華經の力と云ふものは、不思議の中の不思議である。故に宗祖は『況んや妙法の

力をや』と仰せになつて居る、我等の淺はかな智力を以ては、世間の事すら尙不思議であるからして、妙法の力を知る事が怎うして出來やう。去れば、知ることが出來あいと云ふて、匙を投げてしまつたら何んの話にもあらん、其の知る事の出來ん不思議の中の不思議の妙法を、知る事が出来る様になるのが、又妙である。去れば怎うしたら不思議の妙法を、吾々の如き淺智の者が、知る事を得るであらうか、それは信の一字に止るのである。信と云ふ一字が無かつたならば、吾々如何にしても、不思議の妙法を解る事は出來ん、釋尊の十大弟子中の第一の舍利弗尊者は、智惠第一と云はれた人である、けれども最深の妙法を悟る事を得なんだ、法華經の深理を覺るには、信を以て入らなければならんと云ふ事を悟て、最後に妙法の深理を悟る事を得た、須利槃特は信力の強さが故に、普明如來にあつた。末法當今下機の者も、また斯くの如く、以信代慧、所謂信を以て、最深の妙法を悟らなければならん。第一信とは如何なること

かと云ふに、澄淨の義と云ふて、清き流れの如く水晶の玉の如き心を云ふのである、所謂二信なき事を信と云ふのである、又疑念のなき事、言葉は變れども、前の義と意に於ては變りは無い。信とは一言にして之れを言はゞ、法華經と、宗祖の御言葉を、信するのである。宗祖の御言葉は、法華經より發した御言葉なれば、少しも法華經と異つた所は無い、そこで宗祖の御言葉は、法華經と同一と見て宜しい、そして法華經はなせ一切の經文より有り難いか、おせ法華經を信じなければならんかと云ふ疑ひが起さて來るであらう、疑ふては悪いだらうが、一往疑ふの價值があるだらう、疑ひが晴れれば、信力も増す事であらう。そこで釋尊は娑婆往來八千八度びなどと云ふが、何が目的で娑婆に生れられたか、何しに生れられたかと云ふと、吾々の如き凡夫の迷を斷し、悟りを開かしめやうと云ふ、慈悲の御心からして、斯くのごとく娑婆に生を垂れられたのである。生れて何をささるかと云ふと、法華經を説かんが爲に、色々と

苦心を遊ばされたのである、ちや苦心遊ばされたかと云ふと、衆生の根生が不同である爲である。

利根の者は良いけれども、頓根の爲に、直ぐに深理の妙法を説くと云ふ事は出来まい、説いて衆生が悟らなければ、何にもならん、依て色々と苦心遊ばし、法華經を聞くに堪える様に、四十二年と云ふ永い間、種々の經を御説き遊ばされた、そして最後に法華經を、八年の間に御説き下された。

法華經を説かれる前に、無量義經に於て、爾前四十餘年の經文は、皆眞實でない、權方便の經論であると云ふ事を、御説き遊ばされてある、此の文を以て見ても、吾々の依經とすべきは、法華經を除いて、他にない事が分るのであらう、法華經と云へば、八卷二十八品であるが、之れを便宜上假りに二分する事が出来る、前半を迹門と云ひ、後半を本門と云ふ、前半の主とあるのは、何かといふと方便品、之れを主として二十八品を見るのを、唯迹の法花と云ひ、後半の主とあるべきは、壽量品である。之れを主として見た、二十八品、之れ

を唯本の法花と云ふ、同じ二十八品であつて、主とする者が前半にあるが、後半にあるかの相違のみではあるが、其れに天地の相違がある、前半は水にうつる月の如く、後半は天に輝く明月の如く又前者は昨年の暦の如く、後者は今年の暦の如くである、故に吾人は唯本一部の法華經に依憑しなければならん。法華經の肝心は、題目五字である。故に吾人は但信口唱しなければならん、其の功德は妙にして不思議である、但信の一字あるのみ、譬へば小兒の乳を含んで其の味を知らざれども、成長する如く、妙藥を服すれば、自然に病の治するが如く、その藥の何者あるかを尋ねる必要はない。四信五品鈔(二五九)の但信口唱こそ、眞の不思議の妙法に入るべき直路である。

吾人は奈何に生くべき歟

森 亮 遠

一、思想と實生活 吾等は、心の奥で常も佛陀

を慕ひ、無上道を求めて居る。けれども其れが一つとして實生活に表はされた例しがない。のみならず時々の衝動に驅られてはごんを事でもせん限りは無い。この矛盾がいかに吾人の内心を苦痛に導くであらうか。吾等の如き生活にある者は、公然これを發表する事が能きずに悟り切つた様な言行を強ひられるそれだけに苦痛も大きいのである。

こうした矛盾の原因は様々であらうが自己の『力』の不足といふ事が重なるものではなからうか。吾等には何の力もない、周圍に抵抗するの力も無いれば、社會に逆行するだけの力も無い。他人の毀譽を顧み、社會の褒貶を慮つて左眊右顧するより他に何等自己の地歩なるものを發見する事が能きかい、只常に其の折々の境遇に従ふて轉輾するに過ぎない、之れが無力な吾人の生活である。若しも吾等から、此の周圍の于係あるものを除いたをらば、それこそ跡には憐れな、無自覺な生存欲より外に、何の痕跡をも認むる事が能きなからう。あゝ僅に生欲によりて存續せる吾人。そは彼の雨

露を待ちつゝ、咲きのこる屋上の草にも等しい運命では無からうか。自覺！大なる自覺をせねばならぬ。吾人はこの自覺によりて、貴き、力ある吾人の生命を造り上げねはならぬのである

二、靈と肉 吾人が有する兩個の靈と肉とは同時にその欲求を満さんとするの結果、そこに快樂と苦痛とを伴ふのである。吾人が向上性は卑俗なものは捨てゝも高尚なものを取らうとする、併し吾人の感情は比較的卑俗なものに於てより多くの快樂を覺えるのである。斯くて一面に歡迎する處は多方に於ける排斥となつて、敬虔ある思想生活と、さうでもない實生活との矛盾は起り、同時にそれが苦痛といふに到達するのである。故に吾人は靈と肉との調和を圖らねばならぬ。若も此のまゝに過ぎん歟、兩者の葛藤は遂に自然性に迎合され易い肉欲の欲望が勝利を得て、いつかは純潔ある思想信仰をも内醉せしめ、最後にはそれが全生活の破壊ともかる懼がある。故に吾人は兩者の調和に於てその根底より何者をも最も崇高ある靈的光

揚に浴せしめたいと思ふのである。

三、高調ある精神的生活 『業平も飲食つてから杜若』吾人が肉體を有する以上は、全然物質的欲望を離す事は能きまい。随つて奈何に高尚な宗教や藝術の世界に遊ぶ人でも、遁るゝ事のならぬは實社會の風波である。けれどもその内生活を最も高調に把持するの結果、悠々として自家の天地に生さる事が出來やう。彼の繞はる稚兒に銀猫を與へて去つた西行、食は無くとも東山の麓に繪筆を舐めた大雅堂、それ等の人の垢づいた衣の裏に何の悲慘なる實社會の影が秘まうか。之等の如く何の物質的欲望も社會的執着も無かつたならば、慥かに現世安穩である。この境地に至るには、唯徒らに奇矯を學ぶの徒の到達しうる處ではまい。深く人生を識り、宇宙を解するもので無ければ到底及ばぬ處である。現代の複雑なる社會生活に在るものは、能く現代を識ると俱に、足元の明るい實社會に自家の立脚地を發して、そして最も根底より統一を有する思想より、完全なる理想を定め

て、之に向つて自己の全生活を傾注して見たならば、聽てはこの現實を以て理想化する事が出來やう。その思想の表現的生活に於て、動もすれば陷り易い奇矯偏屈に流るゝ事なく、最も高調に、最も熾烈に持續する精神生活は、すべての物質的のものをも美化し藝術化して、其處に渾然たる統一的生活が得られるのである。『御宮仕をば法華經と思召せ。』と教へたまひしもこゝである。風雪身を切る御庵室の中『雪を盛て飯を觀ず。』このたまひし境地も之れである。

四、宗教的生活 何人も如上の境域に入る事の能さるのは、獨り宗教の法悦的生活である。日常の怎麼些事にも一々本佛應用の慈悲を認めて、念々感謝的法悦に潤ふたならば、是れ全く統一ある生活である。吾人は事具の佛である。この觀智と信仰とに於て何の嫌惡すべき社會があり、何の悲しむべき所作があらうか？

斯くて初に疑つた肉の物質的の欲望も、或は却て意義ある高尚なるものとなつて征服せられ、こ

ゝに所謂内外生活の統一は得られるのである。吾人は本化の宗教的生活によりて、偉大なる力と悦樂とを得て、恣に靈的欲望を満足させなければならぬ。

かたる花

猪 口 海 靜

古今東西老若男女、花に對するの愛情に別あらず。兒女は幼き手に弄するを好み、英雄を以て世界の花と云ひ、敗殘の死者も花を以て祭らる。所有物を目して之れを美と感せば、花の形容を以て迎へざるなし。然り、夫れ花は、美の標本おればなり。否、目に見て、其の美を感ずるのみにあらず。花は實に宗教道德の好教訓として、古來聖者の示せるもの少なからず。其の詩歌にいそしむ人、之れを以て好詠題とあすは人よく之れを知る。若し人生に花なからしめば、世は如何に寂寥に、沒趣味に果てん。いか世の文學美術は、亦其

の美の大部を失するに至らん。人生の花に於ける、如是親密の關係あり。

古來美人の異名として、解語の花といふ。蓋し花に固有の愛嬌ありて、人の眞情を傳ふる處に、言語の用をなすありて、無量の感を溢るゝものなくんばあらず。『往時渺茫誰と共に語らん、閑庭唯不言の花あり。』とは、敦光の詩言なり。然れども、之れ不言の花は、不言の言を爲すに非ずや。閑庭、豈に昔を語らざらんや。彼の少女は、太田道灌をして、『山吹の實の一つだに無き』を言はしめしにあらずや。野末の徒花狂花に至るも、人の能く言ひ得ざる言葉を、良く傳ふる力あり。解語の花、豈美のみならんや。梅花の雪を犯して咲くは、古來堅忍不拔の氣象にたとへ、又婦人の貞操に比し、櫻の潔く散るは、武士の身命を惜しまざるに比せらる。本居の『しきしまの大和心』と歌はれしも、それを代表せるものからん。『上を思へば限りあしと下を見て咲く百合の花』の俗諺も、誰かその謙讓の徳を思はざらん。又花は諸行無常

の説明として、古來の宗教家は、之れを言ふ。されど人々其の感想同じからず。予は花を見て無常を感じることが如きは、極めて狹隘ある一時的見解にして達觀にあらず。赤染衛門の『去年の花散りにし花は咲きにけりあはれ別れのかゝらましかは。』と、人は總ての花によりて所謂永生を學ばずんば何んぞ花の眞價を知れるものといふを得ん。嗚呼人生花によりて心を安んずるを得るべし。花亦人を得てますゝ美也。人亦花によりて後人の私淑を促す、管公の梅花本居の櫻花之れなり。されど未だ眞に花に迎へられたる人にあらず、花あり渾中の汚穢に清淨無染の姿を顯はす蓮華即ち之れなり。蓮華に爲蓮故華、花開蓮現、花落蓮成の三義あり。所謂蓮の花の開くは蓮の實の爲めあり。花の開く時は實現はれ、咲きし花散りて實殘るなり。(之れ一々法門あること推して知るべし)又蓮華の泥中に生じて泥に染まざること、衆生煩惱の心より佛身を成ずるに適ふ。花果同時は因果不二なり。世間所有花は如是德を備へず、梅櫻の美花も散り

て後實なる、況んや餘の徒花狂花に於てをや。然るに世間の蓮華は夏のみ開きて常に開かず、汚泥の池に生じて陸に生せず、剩へ風に揉まれ、浪に沈み、氷に閉ぢられ、光に萎む、されど獨り佛性の蓮華は然らず。三世無邊の花なれば春夏秋冬常葉なり。徧一切の花あれば六趣三有に徧く開き、善惡不二の花あれば惡業の厚薄を選ばず、邪正一如の花なれば煩惱の游泥にも染まず、十惡の風にも揉まれず、五逆の浪にも流されず、紅蓮の氷にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎まざるなり。斯の如き貴き佛性蓮華を、上は有頂より下那落の衆生悉く持ちながら、無明の酒に酔ひ、煩惱の闇に迷ひて、遂には身中に光ある蓮華と我性の眞如を知らざる事、貧女が家の寶藏を忘れ、蛟龍が身内の玉を寶と知らざるが如し。即ち佛性は雲中の月、土中の金、石中の火、木中の花の如し。隠れて見えずと雖も、佛性の蓮華は衆生心中に宛然として納め持てり。斯かる深大なる意義ある花は暫く世間の蓮華として、今を去る六百九十五年前、佛使た

る聖者は且らく旃陀羅の子として日本國に降誕せしませし大聖日蓮を迎へたり。

經あり。今を去る三千年前、印度の王族に眞理の人格化せる、佛陀出世の本懷として説き出されし宇宙の大眞理、世界倫理の大王末法五濁の大燈明即ち法華經之れなり。此の經亦此の人によりて豫言を確され、末法當今の闇の中に濟ひの網の手を下されたり。

夫れ法華經の開說者は釋尊あり。判釋者は天台智者なり。之れを輔整せしは傳教なり。而して最後に之れが實行者として現れたるは即ち聖者日蓮上人其の人あり。冬夏の寒熱、春秋の花月、人は惰眠するも自然は常住に活動す、法華色讀の活ける聖者は、扶桑東端安房の國小湊に呱呱の聲をあげ玉ひし時、末法五濁の衆人は、此の聖子に絶對の祝意を表現することを知らざりき。されど自然は如何に、此の旃陀羅の伏屋に人の子として生れたる聖者に對して、偉大なる意義ある蓮華を以て歡迎せり。如月の梅は如何に妙法を表現するに足

らざればとて、此に自然は大英斷にも七月からざれば咲かぬ蓮華をして、二月の寒天に、而かも渥池からざる海邊に咲かしめき。嗚呼！聖詩と言はんか。聖劇と言はんか。あらゆる眞善美を盡く集めたる蓮華に迎へられたる聖者！聖者は建長五年立教開宗旭日が森に天日を對告とし、文永六年廣宣流布を念願して、法華一部を靈岳の山腹に埋め、全八年の相州龍の口の波、宗祖一期の正宗てふ北海寒山佐渡の雪、最後流通の身延の月に天地の大文字を織りなせる聖書は、げに大聖釋尊の豫言をして確實にせしめたるあり。靈長池上に移られし聖者は弘安五年十月一化盡きて安詳として非滅現滅の大涅槃に入り王ひぬ。其の降誕に當り、如月の寒天に海中蓮華の大奇瑞を以て迎へし自然は、こゝにも亦大奇瑞を現して聖者の入滅を遂るに櫻花を以てせりき。げに夫れ櫻花は日本國を表現し、蓮華は以て妙法の不思議を現じ、清きこと蓮華に過ぎん。美しき事櫻に勝るべきや。日本國民は須らく清き蓮華と美しき櫻花とを以て理想と

すべし。是が日蓮主義の特色なり。見よ！聖者の生は蓮華に迎へられ、死を櫻花に送らる。之豈に聖日蓮が大自然をして、日本國民性の精華を花に托して我等同胞に語らしめしにあらずや。嗚呼何んぞ花不言なる。

趣味と生活

望 月 嘯 月

吾人が生活上缺く可からざるものは、生計である。世の中に活きて活動する第一の基礎は、衣食住の三つである。此の三者何れを缺いても、吾人の生活は成立せぬ。否社會に立つて活動して行けぬ。茲に於てか吾人が共同生活の缺く可からざることを知ると共に、他方又生存競争の逃るべからざるに至るは、之れ自然の狀態である。而も一方文物の進化は、長足の發達を示せる今日、生存競争は益々激烈となり、之れに伴ふて生ずる社會道德の荒廢は、愈々慘澹たる景況に至るは何ぞや。

自己が利欲の前には名譽を、地位も顧みず、生存競争の巷に血眼を以て立てる。吁是れ文明國民の一大缺陷を暗示せるに非ざるか。吾人又同じく此の渦中にありと雖も、而も何等趣味なき生活に於ては、絶對に其の價値を認むる能はず。貧者にもあれ富者にもあれ、趣味なき生活をたどるは猶盲人の山水風月に對するが如し。彼の有名なる哲學者エピク羅斯の言に聽け、『我に一のパンと水とだにあらば、幸福に於てフォイス神と競ふをも辭せず。』と。即ち彼が理想生活としては、安らかに楽しい生活を送らんとするにある。

若し然らば、彼が眼中必ず富者を以て幸福とし、貧者を以て不幸の者逆境の人とは見ざるべし。要するに尊き吾人か一生を齟齬として我利一點張りに終らんは、萬物の靈長たる人間の尤も恥づべきものに非ずや。『人生五十年二十五年は寢て暮す』諺を知らざるか、百萬の富みを積むとも冥途の旅に何かせん。寧ろ如かず、千金の利を求めんより一善の利を得んには。兼行法師言はずや、『名利に

つかはれて静かある暇なく一生を苦しむることを愚かなれ、財多ければ身を守るに疎し、害を買ひ煩を招く媒介あり。』と。水を呑み眩を枕にする中に又樂みあり。然らば又何ぞ榮利の爲めに吸々たるや。不義にして富み且貴きは浮雲の如し、自己が藏の畜藏には、名譽も義理も没却して、得々たる紳士はありと雖も、情を趣味の生活悅樂の人生に傾くる紳士はあらざるか。斯の如きは之れ時代の弊惡として止む事を得ざる狀態ありと雖も、亦慨嘆に堪えんや。道德の荒廢は文明の步調と反比し、人情の輕薄は日に盛んならんとす。而も此の社會狀態を以て時代弊惡とし、對岸の火災視せば世は益々慘澹たる暗闇場と化せん。故に吾人は幾百萬の同胞と共に覺醒し、以て此の戰慄すべき社會を脱せん事を思ふと共に、痛切に感ずるは信仰の必要也。信仰は吾人の指導者あり。啓發者あり。然るに世人の多くは信仰を以て冥想的厭生的のものとなし、一種の輕視を加ふるに至る。而も信仰は決して西方思想の如き者ならず、天國の生を與

ふるものに非ず、斯の如きは畢竟死せる信仰也。今吾人が自らも進み他をも勸めんとする信仰は、即ち活ける信仰なり。換言すれば、吾人は信仰の眞價を求め、而して趣味の生活悅樂の人生をたどらんとする也。更らに言はゞ、苦みあり樂あり満足あり不平ある現在の境遇に於て、眞の趣味悅樂を取らんとするなり。總て事物には必ず裏に表あり、表には裏あり、苦には樂あり、故に苦必ず悲むべきに非ず、樂必ず樂しむ可きに非ず、吾人は苦樂の當初に於て最大の悅樂と趣味を認むるを要す。日蓮上人は、『苦樂思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へ給へ。』と言はれしに非ずや。悲慘なる六十年をたどられし上人に於てこの御言葉を拜するは、大に注意すべきあり。彼龍口の夜色伊東の波浪佐渡の積雪と數へ盡くせぬ迫害の裡に居られし上人は、『日蓮は日本第一の富者也』と仰せられて居る。之即ち上人が信仰の絶體發現である。上人が絶叫せられた總ては活ける法華經にして、悉く吾人生活上の勇氣なり又力あり。上人は信仰の權

化にして、上人の一舉一動は吾人が信仰の生命あり。吾人は活きた法華經に依て此社會を渡らんければならぬ。故に『宮仕を法華經と御思召せ一切世間の治生産業實想と違背せず。』と仰せられて居る。其の實相とは宇宙森羅萬象悉く然り、故に吾人の畑に耕すも店頭に算盤持つも、乃至事々物々が即實相の本牀にして、その實相とは妙法蓮華經の五字を離れて別になし、故に吾人の所作悉く法華經の修行で、吾人が身口意三業に此の法華經の修行して行く時、始めて久遠の風光に一如されてこゝに平和な國土現し、天人充滿の寂光土に法悦の春をむかへ、趣味の生活悦樂の人生にたどり入て、大日本の大國民として、歡喜の**タイム**を送る事が出来るのである。故に吾人はこの信仰に依つて美しき樂しき生涯を迎へん事を希望するのである。——大正五年三月十四日於燈下——



鷺峯印象記

露

月

『世に親あき程不惑者はない。』

幼き時から斯く痛切に感じた身分は、二歳の時に其一人の親が遠き國に旅立たれたからである。一度は父に會へる事と思ふた。而し幽冥界には消息は往はぬ。駿府の叔母に父の寫眞の有無を照介したが、それも見えなかつた。『父に遭ひたくば汝の顔を見よ。』と云はれたが、満足は出来なかつた。此に信仰の光に僅か踏み出した自分は、追善を修すると共に佛の不思議力を借りて、夢にだにあくまでも遭はうとした。斯くして幾星霜繰りかへされる内に祖山へ入學し、間もなく清き大衆の末席を汚す事が出来た。或日父の墓を尋ねて法味を捧げ、石碑の下を穿つて見た。其時はもう瓶も骨も美しき土と化して居た。自分は其の年の秋、より多い印象を刻みつけられた。

弦月驚取の山端に懸り、ポーンと告げ渡る暮れ

六の響き、遠く沈み行く谷間のあたりから、鷺の御山の夕暮は次第に襲ひ來た。暖く親に抱かれんと豫期して歸る小鳥はねぐらに急いだ。乙女の腫の様な星は烈しく光を放つた。身解見得信證時解脫不時解脫、日の暮れるのを始めて知つた自分は盛に西谷名目の暗誦を試みて居るのであつた。月の光壁に反射されて紅葉の二片三片、本の上に飛散した。本を閉ぢて冥目した。沈黙した宵は木草も動かぬ。

月は變れど今宵は父の旅立の日——慙う思ふと父を慕ふ血液は燃ゆる様に激烈に全身を流れる。自分は靜に默唱し三界無安の文をたどつた。噫我が父!!と、つかまへ様とした時、柔き風はそッど我が肌を撫で去つて、金線をかなざる様に風鈴に音を立て、蟲は草葉の下から悲れを聲を擧げた。嗚呼自分の眞の父に遭はしめたのは誰だろう? 自分は宗祖の御眞骨を懷きながらつぶやく様に嚴然側に聳えて居つた白き堂に向つて首を垂れ掌を合せた。あゝ忘れ難き鷺峯の夜景! それは自分をし

て宿望を遂げしめると共に、悉是吾子の確き信仰を把持せしめたのであつた。

頼むべきは

松 木 秀 月

人の心の變り易き事は、吾人が常に耳にし、且つ口にする所に非ずや。而して、我等が眼前の總ての現象は、皆是れ、合離變遷常無きものあり。此の變り易き人の心と、限り有る而して常無き現象等、以て限り無き生命を持てる吾人の頼みとするに足るか。否。尠とも吾人の頼みとするに足るものとは、如是昨日合ふては今日離れ、又今日合ふては明日離るてふ、常無きものにては非るべし。必ずや一定不變常往なるものに非るべからず。斯く思ひ來れば、世の所謂、名譽、財産、地位乃至親友に至る迄、皆是れ吾人の絶對的頼みとするに足らず。何とあれば、今日の名譽は明日は不名譽なるかも知れざるべし。乃至今日の親友は、如何

なる事に依りて、明日敵とならずとも計られず。
噫！思ふて此處に至れば、世の中の總ては皆是れ
吾人の頼むべきには非ず。頼むべきは但是れ我こ
ゝろのみ。

心や、或は意とあり、識となり、一切萬業の根
本とある。故に又心を集起とも云ふ。一切善惡の
所作は悉く心に集め、心より起す。正法念經曰く
『一切善不善法心爲根本』と。高き天も廣き地も、
又佛界も、地獄界も、皆是れ心の現れにして、我
等の心は小さき五尺の躰と、短き五十年の壽命と、
狭き眼前の小天地とに限られたるものにあらず。
心の發するや能く天地に參すべし。然して心の誠
なるや、國を擧つて攻むるも之を屈する事能はざ
るべし。宗祖の御一代は能く是を示したるものに
非ずや。北條執權と、及び天下を擧げて、或時には
松葉ヶ谷に焼かんし、伊豆伊東に流し、又小松
原に斬らんとし、龍口刑場の露と化せしめんと企
てて、最後鳥も通はぬ北海佐渡ヶ島根に流したる
あど、所有手段を以て、之を屈せしめんとせしも、

遂に其の理想を曲ぐる能はざりしに非ずや。

如是心や廣大無邊、絶對的大勢力有るものなる
も、往々邪道に墮り易きものなり。金剛石と雖も
磨かすば遂に其の光は出づべからず。古語に曰く
『磨いたら磨いた丈に光るなり、心の靈魂も何の
玉でも』と。若し我が心にして磨かずば、永く煩
惱の汚染に包まれて、邪道に墮し、尊き我が心の
玉は其の光を現はさざるべし。諺に曰く、『心こ
そ心を護る心あれ、心にこゝろ心ゆるすな。』と。
心して我が心の邪道に墮ち入るの暇無き迄に磨き
てこそ、眞に吾人の頼みとするに足る心は成ずべ
けれ。其の方法とは即ち『事にふれ、わりに付け
ても後生を心にかけて南無妙法蓮華經と唱へ、花
の春雪の朝も是を思ひ、風戦ぎ村雪まよふ夕にも
忘るゝ隙無かれ。是等を想ひ忘れて、我慢、偏執、
名門、利義に着して妙法を唱へ奉らざらん事は、
志の程無下にあえなし。さこそは皆成佛道の御法
とは云ひながら、此人爭か佛道に懶かざるべき。』
(遺文八ノ十五取意)と。此の聖訓こそ實にたのもし

き御教へにあらざるか、我が唱ふる題目は是れ宇宙の眞理たる妙法五字に非ずや。我が心は森羅三千の諸法の根本に非ずや。此題目と我が心と合致したる時、吾人は忽ちにして釋尊の因行果徳の二法を獲得して、我身即是の妙法を現じ、我が心の汚染は晴れて明かなる事實鏡の如く、日月の如く智慧の光明三千界を照す時、即ち我が心の眞の尊さを知るならん。其の時の心や、吾人の絶對に頼みとするに足るものあん耳。

如何にせば意義ある 生活をなし得る歟

望 月 本 啓

此の問題は常に余が腦裏を往復した事である。恐らくは余のみではなからう。世の中の總ての人が此問題を或は解決し或は未解決の儘持つて居る事であらうと思ふ。今少しく余の信する處に隨て之を言ふて見やうならば、吾々の此の日常生活の

有様を考へて見るに、吾々は人天の大導師として、否教導職の一員として僧侶として一ヶ寺の住職として、誰から何時何處で見られても耻しくない丈の人格があるであらうか。即ち一坊の主人として其れ丈の價値のある様を生活の仕ぶりであらうか。なるほど人様の前では、随分四角張つて其れ程に見悪い事もせないが、扨て自分の室へ歸つて後は如何である。遠慮なく膝を崩す、何時でもかまはず横にゐる。腹も立てる惡口も言ふ、時に依ては人の頭も撲り兼ねない、旨いものを喰はすれば喜ぶ、少し味が變て居れば小事を言ふ、苦勞を仕事をさせられるとブツ／＼言ふ、勿体ない事であるけれ共、御妙判を拜讀するより小説を讀む方に力を入れる、机の前へ坐て教科書を讀む時間より火鉢の傍らに空談雜語に過す時間の方が長いと言ふ有様。此れが一坊の主人として、坊内の者に尊敬を受ける丈の價値があると言はれやうか。自分等は他人に向つて信仰を説く身ではないか。乍然吾々の説く其の『信せよ!』は、先に立つべき

將校が遙か後方に引き退て居て兵卒に前進の命令を下す様な者ではなからうか、之ではとても『豫言者古郷へ入れられず』位では濟みさうでない、恐らくは自分の寺にも容れられなくあるであらう、古の人が『身を修め家を齊へ國を治め天下を平にす。』と言はれてあるが天下を治めんとあらば先づ國民各個人の身を修めなければならぬ、而も吾々には其れが非常に困難の事である。此れでは圓頂染衣の眞の意味が不分明になつて来る。元來吾々は何の爲めに出家したものであらう？何の爲めに生れ來たものであらう？と考へて先づ我身の日常生活より改造して行かなければならぬ、誠に此の事は天下國家の問題と比べたなら甚だ小さい事ではあるが如何したから寺内の者弟子等にも尊敬せらるゝ様になるであらうかと思ふに、其れには自分も尊敬される様にすると同時に他の者をも尊敬する事が大事ではなからうか、其れにば先づ自己の日常生活を改めて行かなければならぬ、元來今吾々は惑障の爲めに凡夫に生れては居るけれ共

凡夫に始まり凡夫に終るべきの身ではないのである。宗祖の御弟子であるのだ。當体蓮華であるのだ。だから『之れではならぬ』と日一日と佛の道に近づいて行く様に努めると同時に、自分も亦誰も彼も皆貴い所の佛性を具へて居る。今は主従子弟の別はあるけれ共、妙覺の山に走り登つた曉には等しく三身具足の如來であると認めなければならぬ、此れは無理にさう思へと言ふのではない、事實であるのだ。壽量品の御義口傳には吾々凡夫を指して『壽量の佛である』と宣はせられてある。此の理をよく辨へ子弟にも教へて相互に貴び合ふ様にせねばならぬ、言ひ換へたならば自分は一山の主人であるから寺内の者は、皆自分の爲めに働くべきものであると云ふ様を考へを起さないで、内中の者を皆佛にしてやる爲めに、自分の手許に集めた者であるのだから其れ等の佛にゐる爲めには自分の身をも投げ出すと言ふ風に考へたならば、自身も尊敬せらるゝ様になるであらう、此の事は今新しく始まつた事ではない、一僧一山に住職す

るは、其の檀方一統皆佛にする爲めである。否其れ處では亦抑も自分の出家得道したる其の眞の意味が抑も其れであつたのだ。

此の事は獨り吾々僧侶ばかりでは亦、苟も日蓮上人の弟子檀那と名乗る程の者は、必ず此の心掛けがなくてはならぬのである。『己れは一家の主人であるから下女や下男と同等の者と認められては、主人としての威嚴を保つ事ができない。』なぐと思はないで、時に依ては下男の手傳をして庭の一も掃く様にせねばならぬ、其處に主人の威嚴が具はるのである。此の心掛が即ち心に妙法を存する者である。『佛とは何をいわまのこけむしろ只慈悲心にしくものはなし』とはこの心を言いたれものである。提婆品の中に『探薪及果菰乃至情存妙法故』と説かれてある。御身は大王の家に生れ給ひ乍ら、山に入られ給ひしものは、太子自身も佛となり、父母妻子乃至一切衆を佛にしてやらうと思食された爲めであつたのだ。主人たるものにこの心掛があつて、各其の職業に依て、譬へば、一足

の草鞋を作るにも、これを以て、自分も佛になり所従をも佛にするのであると觀じたならば、流るゝ汗も手に揉み出した豆も皆喜びの種となるのである。所従も亦この心掛にて下女が勝手に鍋を洗ふにも、妻が井戸端に洗濯をするにも、之れを以て主人も自身も佛にあり、一家を圓滿にするのであると思ひて、夕に喜んで歸る主人を喜んで迎へる、一家喜んで先祖の前へ南無する、これが即ち宗祖上人の『唯だ女房と酒打ち飲みて南無妙法蓮華經』と宣はせられたる謂であるのだ。斯してこそ、始めて眞の生活の味ひを知る事が能るのである。名譽も富も斯くして得たる者こそ眞の名譽であり富であるのだ。斯くの如き家庭が集て一村乃至一郡一國をなし、終に日本國中是の如くなりたる時が、即ち宗祖上人の所謂『吹く風枝をあらさず雨壤を碎かず、代は義農の世とありて今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、人法共に不老不死の理顯れむ』と宣はせられたる時であるのだ。これが沙婆即寂光煩惱即菩提生死即涅槃を顯現し

たものである。

宗祖の御銅像を拜して

小林 貞 宣

袈娑凜留色 瀝盡滿腔丹
天地納三諫 風雷排萬難
宣闡無上道 成就甚深歡
妙法蓮華相 雲開十丈寒

日蓮上人銅像贊 石塚居士 永坂周拜艸

此處は九州博多東公園、廣い松原は、縁滴るばかり枝の汐風に吹かれて、或は眞直に、或は曲れる等あり、中に嚴然として立てるは宗祖の御銅像である。正面に『立正安國』と太く大きく掘りつけてある。

笑へば子女も懐かしみ、怒れば龍虎も恐る御説光、御袈娑は凜として空に翻へり、雲を開いて丈高く、御生涯御奮闘の有様は、今猶雨と闘ひ風と争ひ、自分をして地に伏し歡喜と尊敬との涙を

以て拜せしめた。宛然生身の宗祖に遇ひ奉る心地して、唱題は腹の底より湧き出でた。あの深草の元政上人が延山に詣で『俱に末法に生れて師に逢はず。』と詠じ給へる詩も、自分には俱に末法に生れて師に逢ふのうれしさ、之に比ぶるものはあかつた。春の曉に、朝霧繞ぐる松原を裸足にて參拜する人老若男女、何れも一同に銅像前のうがひ水にて手を淨め口を濯ぎ長い線香を林の如く立て、煙は霧と一つにあり、松原の中は眞白にある位である。かくして御銅像前の石段に座して、一同の腹より絞り出して唱ふる御題目は、松原に響いて寂光土を眼前に現じた。殊に若き婦女子の細い、しかも透る聲で、一心に唱ふる題目は、他に稀に見るところで、全く感服の外はなかつた。御銅像の石段を上つて御姿の周圍を繞つて見るに、御臺座には御一代記の圖と蒙古襲來の悲惨な圖とが刻してあつた。御一代記の龍之口法難、及び小町の辻説法の宗祖の御顔は、信徒が手を以て摩擦すると見えて光つて居た。この一事を見ても如何に九

州人の熱烈ある信仰を持て居るか知れる。この御像より一町ばかり隔てたところに龜山上皇の御銅像がある。宗祖の御像と比すれば宗祖の方が遙かに大きい。

何故に九州人は熱烈な信仰を持て居るか云ふに、自分の考へでは、正嘉正元の頃蒙古大軍の襲來に遇ひ、無慘にも我同胞は彼等の毒手に罹りて多く死し、且つ國家の危機は累卵の状態であつた時、龜山帝は痛く國家を憂へ、玉体を以て國難に殉ずと宣ふた、時に宗祖は出でられて御旗曼陀羅を圖し給ひ、之れを以て蒙古の大軍を退けた。この御旗の御加護によりて國体を安泰にせられた故、其當時の人民が信仰を以て唯一のものとし、其の流れが今日に至りかように熱烈を極めて居るのであらうと思つた。

此御銅像こそ、故佐野前勳上人の力と、其時の信心堅固なる信徒との力で出来上つたものであるといふ。實際師は宗門に偉大な貢獻をした人で、師の様な人が此世を早く去つたのは全く遺憾であ

る。

此の歴史ある地に御銅像を立つたのは、師の凡人に卓越して居る事が知れる。如何なる無宗教者無信仰者でも、一度此御前に至つたなら、必ず頭を垂れ合掌せずには居られないと思ふ。

自分は初めて此處に詣で、尊敬と感歎の外はあかつた。

聖祖の御傳記を拜讀して

中 村 義 明

夫れ船は磁石に依りて航し、汽車は鐵路に頼りて通ず、人生豈教法なくして濟るべけんや。

人智未だ開けざりし古代僻地に於てすら、已に彼此の禮あるを見る。人にして世に處する一日も是れ無かるべからず。而して此教法たる國土に因りて異り、詩代に應じて差別あるを免れざるなり。之れを吾國の史實に徴するも、太古中古戰國と次第に世連に伴ひ變遷ありしを知る。

而して此教法は自ら一條の信仰となりて、世間の思想道德を司配するの原動力をあすものにして實に教法正しければ其國昌へ、邪法行はるれば其國紊る。國家の盛衰は偏に教法の直否にありと謂ふべし。是れ正法の國家人世に離るべからざる所以あり。

伏而惟ふに、今を去る凡そ三千年中天竺に降誕在したる悉多太子は、天資聰明、夙に文武に通達し給ひしが、漸く長ずるに及び世間の有爲無上の理りを觀じ、奈何にもして之の苦患を脱れしめんと、十九歳にして強ひて出家し給ひぬ。斯くして三十成道の曉に至るまで十有二年の間、或は婆羅門仙に仕へて薪水の勞を採り、或は日に一麻一米を食して苦行を重ね、或は菩提樹下に端座して思惟を凝し、我若し無上大菩提を證せずんば、寧ろ身を碎くとも起たざるべしとの大決心のもとに、積苦累德終に内外の魔障を降伏して成道を遂げさせ王へり。

此の如く悉多太子は衆生教化の方便として、幾

多の艱苦を垂れさせ玉ひしと雖、固より三世了達の大聖にましませしが故に、畏くも當初の本願に基き、非滅の滅に入らせ玉ふまで、五十年の御生涯を、三界の火宅に耽溺せる現當の迷衆を憐愍教化せんが爲に種々の教法を説き、無量の衆生濟度に竭させ玉へり。是れ即ち三界の教主吾等が本師釋迦牟尼佛にて在しき。世に聖賢多しと雖、曷ぞ釋尊に比するものあらんや。教法多しと雖豈佛法に優るものあらんや。

父母の其子を養育するに、其幼時只管無病にして恙あからん事を祈ると俱に、又其終生の幸福を希ふは恩情の自ら然るあり。

大覺慈尊一代教説によりて、在世結縁の衆は遍く教導し玉ふと雖、滅後垢重の凡衆を惑ませ玉ふこといと深く、當來正像末の三時によりて其機根に優劣あるを洞察し、其所説の經典に於て各適性を定め玉へり。乃ち正像二千年の間は在世を去ること未だ甚だ遠からず、佛縁尙盡きざるを以て顧慮すべきこと少しと雖も、此期を過ぎて末法の始

めに入らば此間に流布せられたる大小權實の諸教
難亂の世となりて、國土と衆生と皆俱に正道を失
ひ、闇迷に墮すべきを慮り、此五濁惡世を救ふべ
きの良法は四十餘年經說の後始めて如來の本懷を
開顯せられたる尊無過上の法華本門の大法なるこ
とを宣し玉へり。

然り、前言せるが如く法華經の宣説はたゞに在
世利益のみに止まらずして、寧ろ遠く末法の迷衆
を救ひ玉はんが爲めなり。然かも彼の末代の衆は
如來の出世を去ること既に遠く、佛緣亦絶して深
く迷見に入れるが故に、之れを教化せん事甚だか
たく、得記の二乘迹化の菩薩にては到底其任に堪
えざるを知らしめし、之れ等の人々の請願を斥け、
特に本化六萬恒沙の大士を召し出し、其上首上行
菩薩に此法華經を付囑し、後五百才闢淨堅固白法
隱沒の世に出で、衆生濟度の大業を完うすべしと
告勅せさせ給ひぬ。

かくて釋尊滅後の教法は識言の如く東漸して唐
土を経て朝鮮に入り、尋で我國に傳はれり。唐土

の佛法は今之れを措く、吾國傳來より奈良朝に於
ける佛教は、多く唐土より傳來のものにして、南
部六宗おど一時は盛大を極めしが、後漸く衰運を
見るに及び、之れに代りて出でたるは平安朝の佛
教なり、是れ天台眞言の二宗にして、傳教弘法の
先師によりて弘まりぬ。然るに此二宗も復た次第
に衰へ來りしかば、世は今や新宗教の現出を促す
に至れり。是れ聽て鎌倉時代の佛教ありとす。

如是教法の流傳盛衰の有様恰も車輪の如く、其
外觀上に於ては盛大なるが如きも、其内面を視察
する時は、之小權實の法混亂して既に佛祖の眞意
を亡ひ、佛教の正義を滅却せるの時なりき。然る
にこの時、法然榮西の開きたる淨土禪宗の新宗は
かゝる惡世を救護するの要法には非ずして、却つ
て眞言律宗等にも劣らざる邪法なりければ、世は
益々惡道に陥り、人心は愈々腐敗して、遂に北條
氏の如き畏くも尊嚴なる皇室を憚らず三上皇を
遷し奉りて、前代未聞の不臣潜上を敢てするに至
りぬ。

時既に末法に入りて百七十一年、曾て佛識の示させ玉へる白法隱没五濁闢諍の世あること疑ふべくもあらず。

斯くして末法早く至り、世既に紊れ、人心皆昏惑せり。今や正しく佛勅を蒙れる上行菩薩の出現し玉ふべき時期には非ざるか。此時にして出で給はずんば、孰れの世にか世尊の告勅を果させ給ふべき。傳教大師宣はく『正像稍過ぎ已つて末法太だ近にあり、法華一乗の機今正しく是其時也』撰時鈔と戀させ玉ひしより爰に四百年、本化上行終に出でさせ玉はざるか。

茲に房州小湊の浦に貫名次郎重忠といふ人ありけり。其祖は遠く鎌足公に出で、中ごろ遠州貫名に移りしを以て氏となす。代々豪族もて聞へしが、重忠は實に廿二代の孫なり。去る文久元年故ありて彼地に配せられしものあるが、夫妻俱に溫厚にして至誠あり。且信仰の念極めて篤かりき。

第八十五代後堀川天皇の貞歷元年二月十六日の拂曉、此海濱に時ならずして青蓮華忽然として咲

き匂ひ、重忠の宅畔に又清泉噴出の奇瑞ありければ、里人奇異の念に打たるゝ折しも、午の刻重忠の妻玉の如き一男子を挙げたり。兒生れ乍らにして氣品あり、父母悦ぶこと限りなく、此兒生長の後は、通れ父祖の名を上ぐるべしと善日磨と名づけ愛育せり。是れ實に佛滅後二千百七十一年にして、此の寧馨兒こそ佛勅に應じて降臨しましたる本化上行の再身、末法の大導師吾祖日蓮大聖人其人にてわはしけれ。

梅檀は二葉より芳しとかや、善日磨幼き時より容儀人に勝れ、漸く長するに及びて頻りに出塵の志あり、十二歳にして郡の雄刹清澄山の道善法印の許に投ず、道善一見其非凡なるを知り、名を藥王磨と更め心を籠めて教養すれば、天資英發の上人加ふるに孜々精勵せられければ、學識の進歩日を追ふて甚しく、越えて延應元年十月八日薙髮して、更に是性房蓮長と稱し給へり。

斯くて蓮長師清澄山上刻善修學し玉ふ事數年、畧ぼ教學の主旨に通じ、今や才學一山に比おし。

一夜又も眼を經文に洒せる折、一疑忽ち胸中に湧く。覺えず卷を投じて洪嘆して云く、『河水は數派に岐ると雖、其中自ら本流のあるあり。釋尊一佛の敎說今や八宗十宗の多さに岐れて各勝劣を諍ひ雌雄を論じて歸する所を知らず。然りと雖其中釋尊の正意を得たる本流なるもの、必ずや一源なるべし。如かず我進んで諸宗の奧義を究め、佛敎の淵底を搜ぐり以て自ら所疑を決せんには』と。

茲に於て本尊虛空藏菩薩に立願して、靈感を享け給ふに及び、胸裡豁然として更に光明闇夜を照すの大智解を發得し玉ひぬ。

蓮長師既に諸宗研究の壮志を立て、十九歳の時先づ鎌倉に出で、淨土宗の敎旨を叩き玉ひしより、技山に三井に南都に高野に京師に、あまねく諸宗の奧義を窮め、更に儒學國學の大義をも修め、殆んど天下の智識を學び給ひし後、再び技山に歸り、一意專念天台大師の摩訶止觀を繙き給ふに及び、多年の一大疑問は宛ら池氷の天日に照されて融解するが如く、忽ちに解決せられて法華經は圓

敎なり實經なり、諸經中王最爲第一の經文あり。之れを外にして釋尊の正意に適ふべき經典なしとの鐵案を下し給ひぬ。

上人熟ら世間の有様を察し、法華經の經文によりて案じ給ふに、五濁闢諍の今時は、白法隱沒して妙法開宣の時なり。即ち是れ上行菩薩の應さに示現あるべきの時なり。然るに未だ見えさせ給はず、我先づ之が先驅たらんかと、慨然として法經の行者を以て自任し、一身を抛ちて妙法弘通の大任に當らん事を期し給ひぬ。

爰に十有五年の遊學全く畢り、三十二歳の春故山に歸り、建長五年四月二十八日旭の森に立ちて本化下種の妙法蓮華經の五字を天日に向つて開顯し、大衆に宣言し給へり。

由來新宗の前には必ず大敵あると先聖皆然り。上人開宗の當日より三類の強敵勃然として起り、忽ち故山を追はれ、更に鎌倉に出で、四個格言等を以て邪宗を破却し給ひしかば、刀杖瓦石濱出遠流等の大小の諸難涌然として雨の如く、或は謗徒

の爲に焼打たれ、或は伊豆に流され、或は小松原に襲はれ、或は龍口の刑場に上り、或は佐渡の雪中に埋れ、萬死に一生を得給ひし事再三に止まらず、其一代に於て大難四個度居所を追はるゝ事二十幾度、其他の法難幾何なるを知らずと雖、原より忍辱心決定の本化の大聖一々勸持品の佛識に符合せるを悦び一難至る毎に勇氣百倍。

『詮ずる所は天も捨て給ひ諸難にもあへ身命を期とせん善につけ惡につけ法華經を捨つるは地獄の業あるべし、種々の大難風の前の塵あるべし、我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん』(開目抄)との大慈悲の許に三毒熾盛の迷衆を化導し給ふこと茲に二十二年國家を諫曉し給ふもの三度、外には折伏の利劍を振ひ内には大悲の涙にむせばせ給ふ。

『鳥と虫とは鳴け共涙落ちず、日蓮は泣かね共涙ひまぢし』(諸法實相抄)と、嗚呼吾人此に至りて唯無言の裡に感佩の情禁する能はざるなり。

如是にして今や大法漸く海内に洽し、然るに執

權時宗世間を憚り、いたづらに大法に諛ひ、上人を俟つに壹千町の莊田と一篇の宗牒を以てせしかば上人遂に其覺醒せしむべからざるを知り、時宗を叱して其贈る所を斥け、去つて甲州身延に入り九ヶ年の間師弟の教養と大法の著述に萬法萬年正法流傳の基礎を定め給ひしが、遂に御年六十一、弘安五年十月十三日池上宗仲の邸に於て不滅の滅に入らせ玉へり。

謹んで聖祖の御生涯を案ずるに、閻浮提内廣令流布の佛勅を奉じて日本國の一切衆生の苦みを日蓮一人の苦なりとして、妙法蓮華經の五字を母が赤子の口に乳を入れるゝが如く、我等に持たしめんと勵み給ひし、法華色讀の大慈悲に外ならざりしなり。

今や聖祖の入滅を去る事爰に六百餘年、歷代傳燈の諸先師不惜身命の聖懷妙法を繼ぎ給ふ、吾等多幸にして生れて難値の妙法に値ひ法運繼紹の身となれり。奈何にして無邊の恩德に謝し、奈何にして佛祖の聖者に應へ奉るべきか。恒に思を爰に

致し異体同心奮勵努力以て四海飯妙の聖業を扶翼すべきなり。

祖の御威徳

井 上 恵 妙

建國茲に二千五百有餘年此間英雄豪傑の士は雲の如く也而も其の中多くは劔を以て天下に稱せんとする者多かりき、彼の宗教界の英雄僧にては弘法親鸞法然等の高僧在りと雖も所謂天下の英雄僧に至つては僅に聖祖一人ある耳、誰一人として宗祖に伍す者あらんや。

彼の一切衆生を救済せんが爲建長五年四月二十八日始めて宗旨建立し給ふ時に聖祖御年三十有二歳、之日蓮が身を以て法華經の爲に奮闘せんと發誓し給ふ宗教改革の宣言なりき。之と同時に折伏逆化の旗を東海に上げ給ふ。猶多怨疾況滅度後の金言虚しからず、三類の強敵盛に刀杖瓦石の難は言はずもあれ、或は東條の難、伊東の災、龍口の厄

佐渡の雪、あらゆる人生の辛酸を嘗め極度の逆境に反抗したりき。

嗚呼宗祖聖人は安房東條の片海に生れ觸も荒き聖陀の襦袢の中に育ち日本をして世界に覇たらしめんとの向上心は豪も社會の容る所とあらず、遂に衆俗の怨忌を受け弘安五年の非滅を現はし給ふ迄、六十一の全生涯の逆境ならざるは無く、迫害ならざるは無かりき、其の六十の老齡に至りても寒雪に苦しめられき、而も宗祖の大覺心は他事も無く救世の大悲願即折伏の御弘通ありき。

吾々は宿福深厚にして難遭の大法に遭ひ奉り加之御門下たるを得たりしは何たる幸福ぞや、宣しく正暇斷民克己奮勵して他日宗家の有用の材となり、二陣三陣續いて聖祖の大慈大悲に酬ひ奉り他日閻浮同歸の基を期する耳。南無妙法蓮華經！



報 恩 謝 德

渡 邊 泰 深

私共は見るもの聞くもの觸るゝ物に對し慾心絶ゆる間もあく、只貪慾の情念の外に何もなく、之れが爲に食ひ、之れが爲に着、之れが爲に住ひ、之れが爲に働き、人生の九分九厘は貪りの奴隷とあつて過ごします、誠にはかない情けない、惑むべき底下の凡夫であります、私共は何故慾心が去らぬのでせう、例へさることは困難と致しまして、もせめては一日の中一時間ありとも淨い高い聖賢のやうな情念にあることが出来ぬのでせうか、高僧智識と後の世に崇められた往昔の方々も初めは私共同様な慾心の深い愚痴の凡夫でありましたと存じます、同じ末法といふ濁世に生れそして同じ國土、同じ境遇、同じ機編の人となつて、何故かやうに天地の隔てがあるであらませうか、諸經中王最爲第一の法華經を信ずるものは屹度人間の中

でも最爲第一とならねばならぬ筈です、私は堅く信じます、聖祖は必ず其の道を明に私共凡夫に御示し遊ばされたとを『凡夫にてはせば慾心も起り候か』嗚呼聖祖は私共の淺慕な慾心根を慫れど御思召して慾心の起るのも尤もぢやと深い御慈悲を垂れさせ給ひ私共の罪惡を御寛容下されましたこの大同情の御詞を蒙りました丈けて此上もない満足、この上ない歡びの誠意を捧げねばなりません。罪の深い私共凡夫に大同情を注がるのみでなく、私共を一足飛に聖祖同様の高い境界に導いて下さるので、世之れ程の慈悲深い救ひ主は外にはありません、私どもの慾の深いのは歎かわしう存じますが、この慾の凡夫が其のまゝ佛にちれる道を御示し下された事故何を歎くに及びません、寧ろ大に歡んで勇氣を起して一番奮ひ起たねはならぬ筈です、『即慾を捨てずして佛になる道こそ候へ』と慥かち御證明を受けたからには最早慾の凡夫ではなく、雖て佛の位を紹ぐべき大切な佛の御子でありますが故に自分の起居振舞から辭つ

きさては心懸等も自から改め、父母師匠たる聖祖の御名に汚れをかけ申さぬやう致さねばありません私共たる所かゝ者は御恩や御慈悲を蒙つて居りますと、初めは其の御慈恩に感激して一心に御報恩の御任致しまするが、爛れるに従ひ月日のたつと俱に何時しか例の我が儘勝手が起つて参り、遂には小言を言つたり屁理屈を並べて不平など洩したりするやうになります、情の篤い人で母親などゝ口諍ひする者があるのもつまり親の恩に爛れるので其の根元を質せば依然孝養の念は變らぬのです、されば私共はこの御高恩が大に身に感じ深く泌み迄んだからには月日が経過ばとて決して御恩に爛れて疎情に思つてはありません、益々御給仕の志を勵し御恩の爲め身を粉にして働かねば濟みませぬ、そして朝に夕に聖祖の前に罷出で自分が慾心の深い凡夫である事其凡夫が大慈悲の御力で救はれる、従つて聖祖の手に救はれた輕からぬ身であるからには佛子としての務をなさねばならぬ事等を心の底から申し陳べて少しも詐り飾ること

なく、日々の不如法の事をも併せて懺悔し、仰いで聖祖の御姿を拜しましたらば其の時の私共の心の嬉しさは何んとも譬へ様はありません、此の清らかあ美しい心を常に持つと何處に身體は居ても私共の眼にアツく御姿を拜する事が出来て聖祖の御前に參たと同様な思が致します、理屈や種々の法門談義を學んで身に守るよりいと容易い所の妙法五時の御題目を唱へ御聖祖の前にゐるといふ決心が第一であります、それさへ忘れねば何事も怖ることなくまた自ら他に迷はされたり慾に心が動く様な事は決してありません、何時も聖祖の御前に居る事を忘れてはそれが墮落の根元であると堅く信ずべきであります。南無妙法蓮華經！

我は本化の門下也

江 原 一 夫

靜肅ある或夜、書齋に獨り祖傳を繙くの時、法の響と云ふか天地の聲と云はふか、吾が胸奥深く

傳ふるあり、目を閉じ心を沈めて靜かに聞けば、いとも妙なる調べ高く低く將た又細く、法界の私語宇宙の聲、有情非情草木國土に至るまで、成佛せしむるの眞理を、一言に云ひ現したる妙法の温かき梵音、よく聞けば、一佛乘をたぐる信浮の友の唱題の聲、奥ゆかしき法鼓と調和して、幽谷を訪づる響きあり。此の靜閑なる折しも、豁然として吾を激する在り、知らず沈黙座せば、今更の如く、何故にかゝる偉大ある英僧、具つ大和民國の大導師、いや總ての日本人中吾等が最も信賴す可き、日蓮大聖人の一分子たるの、忝けなきを得たりしか、同時に宗祖の佛陀の金言、我不愛身命但惜無上道現身に、來らせ給ひ、長くも無き、六十有餘年の御生涯を、只一日の如く、末法の暗を照す可く、否後世の吾等の爲めに、至誠の安慰を與へしめんと、御誓願の下には、遠離於塔寺波加刀杖者の諸難を鴻毛の輕きに比し給ひ、波荒き伊東が海角に、可惜尊き罪なき御身の流罪の止むなきに至り給ひし時等、或ひは寒氣激しき

日本洋上の孤島、佐渡に流難に遭遇遊ばされ給ひし時、將た七里が濱邊瀧口の渚に、正に一陣の塵と果てなんぞせられし時の如き、噫偉太なる哉『妻子所領眷屬の爲めに、身を失ひし者多し、然れども法華經の御爲めに、身を捨つるものなし、只日蓮一人なり』と叫ばせ給ひ、勇姿泰然自若として自からかゝる迫害の、佛陀の記文に當れるを、無上の悦と轉じて終生送くり給へる、其の献身的偉大なる御精神に、謝し奉るゝもに、吾は『日蓮聖人が愛子なり。』吾は『佛陀の聖子あり。』との自覺沸然として起り、夜半孤影寥しく、思を遠き六百有餘年の昔に致しては、多々益々、感慨無量、己の過去幾年他事に過ぎ來たりし事の愚かさ、いざ起らん、奮はん、自覺せん、この感難然として激し來り、果ては此の微弱なる五尺の身心、一躍しては宇宙法界の主權者にてもあるらんかと、目覺めたり。噫かくて宗祖の出家の立志たるや偉然たり。時しも大聖人謂らく『吾今父母を離れて出家せんは安逸を得んが爲めには非らず、一編に佛智を求

めて、迷の衆生を救はんか爲めなり』と。少にしても已に斯の如き、『吾は末法の大導師とならん、吾は日本の大船とならん。』てふの大自覺を抱き玉へるなり。吾出家以來日尙淺く、研學未だ微薄なりと雖も、過ぎにし幾年春暮正に開けんとして二三の草客美花を伴ひ來たりし頃『吾は日蓮大聖人の御弟子とならん』吾は信を探りて人生の眞義安心立命の境に入り飽までも活躍せん』との一朝の覺悟の下に、一家團圓の綱を破し、山寺の窓に佛書を繙くの身とあり、然して今や祖山が峯にかくも尊ぶべき聖教をたぐるを得たりしかり。さらば、吾等は如何でか宗祖のあの光彩ある且は妙なる御生涯を六百有餘年以前の出來事として、只驚異の目を見張りつゝ過ぐす事の出來得べき。飽までも献

必的宗祖の爲めに、否佛陀の爲めに奉仕して、常在此説法の御記文を念頭に抱き、大上人を此の現身に來たらし、日々夜々に於て吾孤身に活けるに非らず、吾は大上人とゝもに活けるあり、この大信仰を保ち、天地に恥ぢるかく心明正大第二の宗

敎家たる吾等の本務を全うし、過去六百有餘年の大上人の生涯を、此の現生活に輝かせて、大上人の末法々々々と叫び給ひし、今世を大聖人の御精神の如く、向上さす可く、一大奮闘を試みざる可からず。

人生と勞働

辻 芦 洲

働け額の汗と壯者の日に焼るけた筋肉とは、惡魔を驅逐するの最良の神符なり。

人生此の世に於ける生涯は、大部分勞働の生涯と稱すべきなり。仕事を爲すは常人にありては世間普通の狀態あるなり。苟も人と呼ばるべきの價値あるものは仕事を好み且是を爲すに堪ふるものならざる可からず。總ての人皆忙はしく働けるにいかで我れのみ怠惰あるべけんや。怠惰なるものいかで能く社會の尊敬と體面と責任とを持續して永久に是を失はざることを得ん、勞働は最良の新

教育者なり。如何となればそは人を驅りて他物と接觸せしめ、依て以て世間の實相を了解する事を得せしむればなり。人若し古今の傳記を繙かば、最も價值ある人物は最も其の職業に勤勉に、最も其の研究に忠實に、最も其の企圖を遂行するに勇敢あるを見ん。勞働は實に價值あるものを得んとするに當りて必ず拂はざる可らざる代價なり。偉大なる人物は、不撓の勤勉と百折屈せざる堅忍とを以て能く其の光榮の地位に到達することを得たり人は假令如何ある天才を有するも、將た又生れながらにして如何に聰明穎悟あるも、此世に出でたる上は、其の必然の刑罰として、勞働することを免かるゝ能はざるものなり。然れども勞働は畢竟刑罰にあらずして快樂なり。セントオーガスチン曰く『世に勞働せずして暮らす程苦しきことなし』高潔偉大ある目的に其の一身を捧げ周到の用意を以て其の熟慮したる計畫に進み行く人は稱すべきかな』と。但し勞働の功果の最も著しく顯はるゝは、寧ろ人生の高尙なる方面にあり。見よ、

怠惰あるものが是を蓄積する歲月の半ばにて十分なるにあらずや。サンスクリットの古諺に曰く、『幸の神は常に獅子の如く勇敢に立ち働く人にのみ附き隨ふものなり。己れが失敗の原因を只薄倖の故にのみ歸する人は到底薄志弱行のそしりを免るゝこと能はず』と。人生の障害、其の過半は、放逸疎惰の性質よりして起るものなり。怠惰は實に青年を誘惑する最大の危險なるが如し、或一種の青年には兎角仕事を爲すを厭ひ何事にても少し骨の折るゝことは是を爭ふて避くるが如き風あり凡そ如何なる人にも『汝は世の中に於ける無用の長物あり、汝は放蕩懶惰にして、漸次破滅に近きつゝあり。』などの言を甘受するものはこれあらざるべし。且それ何等の仕事をも爲さずして、安閑と歲月を徒費する人々は、殆ど人生の享樂を失ひつゝあるものと謂ふべし。彼の生涯は常に休日なるを以て、眞の休養の面白味を解すること能はず寢てゐて暮す者は決して事業をも爲したる例なきなり。一切の出來事は皆彼を度外視して電光石火

の如く走り過ぎ、彼を昏睡と孤獨との内に放棄し去りて、復顧ることあらざるなり。クラップロビンソンの言に曰く『通常懶惰と稱するものは、畢竟これ無識的に己れの無能力を自覺したるものに外ならず』と。ジェレミ・テラーは曰く『懶惰は生存せる人の葬式あり。懶惰なる人は、世間の變遷とは何等の相渉る所なきが故に、神の爲にも將た人類社會の爲めにも何等の用無きものあれば、死したる人と毫も相擇ぶ所なし。彼は只害虫虎狼の類と等しく其の光陰を空費して、徒に地上の産物を食ふのみのものなり。斯くて時來れば、其のまゝ死に果つるのみ何等世上に貢獻する所有らざるあり。彼等は鋤を握らず重荷を負はず、其の爲したる所の物は不利益のみ、害惡のみ、懶惰は實に此世に於ける最大の浪費なり』と。

古のギリシャ人は、夙に勞働は社會の目的を達する上に於て缺く可からざるものあることを主張したりき。

ソロンは曰く『仕事を爲さざる人あらば、直ちに

捕へて裁判所に送致す可し』と、又或西哲者曰く『仕事を爲さざる人は盜賊なり』と。實に古の俚諺に曰へるが如く、懶惰なる頭腦は惡魔の仕事場也、何となれば人は何事をも爲さざる時は、動もすれば不善の行爲を考へ出すものあればなり。己は少しも仕事を爲さずして、而も己は仕事を爲す人間よりも以上かりかど考ふるが如きは、其の罪恕すべからざると同時に、又極めて憐れむ可きものなりと言はざる可からず。凡そ活動的盲目と放恣放逸は道德の基礎を危殆にし、人類社會の勇氣を阻喪せしむるのみならず、又生涯醫すべからざる幾多の苦勞を生み出だすものあればなり。惡魔は常に光明なる天使の如く粧ひて出現し、罪惡は常に快樂の假面を被りて其の誘惑を逞しうするものあることを知れる人は、世に最も善く知れる人と云はざる可からず。土耳其の俚諺に云へるあり『惡魔は怠惰漢を誘ひ、怠惰漢は惡魔を誘ふ』と。人若し懶惰の美しき僞の光に、誑かされて其の後

へに従ふときは放恣に續いて忽に亡滅至り、歡樂は一朝の夢と消へて、悲痛哀傷交も踵を接して迫り來たらん、豈畏れざる可けんや。かせぐに追付く貧乏かし、奮闘せざれば勝利かし。

延山の春曉

柳 緒 生

二日のまだほのくとするに、急ぎ床を離れ洗面なごするに、日輪はすでに東に輾り出でんとす其の金色の春光、次第に強く、朝霞に包まれし四方の山、鈍き鉛白色の奥之院、見るく透きとほり、今や東山は薄き桔梗色の光を帯び、其の清麗言はん方なし。未だ霞に閉せる庭の櫻花、彼方よりさこゆる讀經の聲、濃霞の裡に眠る鶯谷には、老の鶯のそれにも似ず、恥しげに二聲三聲法華經！春の女神の佐保姫が、たくみの美、賤敗の吾れに新しき希望を與へ、靈しき光明、胸に復活の生命を與ふ、噫偉大なる哉春の曙。

本院内諸堂案内記

山 内 慧 戒

菩提梯を登りて天門に達し、正面の赤い御堂は祖師堂である。左の空地は本堂建設地。彼の向ふの高き峯は思親閣の靈場身延奥の院である。登口に老杉一本屹立して居る下卒塔婆の行儀能く建てる塔場所と云ふ。轉回して後方に見へる嶺は、鷹取山である。祖師堂に一禮し右折して進めば右に小さきトタン葺きの屋根は、鶯谷寮とて祖山學院生の寄宿舎と教場の一部。左方小高き處の白壁の堂は、宗祖の御眞骨堂。其の前は拜殿である。其れより釋迦堂、納骨堂と並び、正面大玄關に鳳凰の彫刻ある棟は大客殿にして、其の次に建てるは法喜堂である。此堂内に這入つて、事務所より開扉の札を戴き、客殿の龍の間、松の間、千疊敷、正面の額鎮國道場は大宰府宮小路康文氏の筆、床上の軸南無妙法蓮華經は支那人某の筆、左折して往けば納骨堂に到る。三寶諸尊の兩脇に安置せるは

日朗、日像、兩菩薩の尊像にして、硝子障子の内に陳列しあるは、全國信徒の納めし祖先妻子の遺骨である。半圓形の廊橋を渡れば釋迦堂にして、此の堂は往時西谷檀林の講堂なりし由、明治八年の火災後此處に移し釋迦堂とあす、其れを又飯本堂として三寶諸尊を奉安すと聞く。兩脇に七十有餘年の小さい赤き厨子は當山歷代諸聖人を安置したる位牌にして、此の堂に於て學院の生徒は毎夕の勤經を營のである。更に進み、御眞骨堂の拜殿をすぎて、身延山と鷹取山の間の領線の向ふに、カレが見へるは七面山である。祖師堂の札場に開扉札を渡し自我偈を讀誦し、宗祖の尊像を拜す。この尊像は中老僧日法上人の御彫刻の由。元來し方へ歸へり拜殿の外椽を廻りて、白壁の堂内に入る。堂内一圓燦然たる莊嚴の中に、宗祖の御眞骨を拜せば、衷心より信念を發し、元政和尚の『何故に碎し骨の名残ろと思へば袖に玉を散りける』の和歌を偲び、無量の感に撲れながら拜殿に於て文永十一年 宗祖が同日に三幅御認めの御本尊、

並に身延山開闢興記の御書の靈寶を拜して、大客殿に歸へり、左折して見れば庭園泉水の向ふのを水鳴樓と呼び法主猊下へ、御對面の時此處に於て遂げ。猊下の御居間及書齋は其の右にあり、庭園の右に入口ある書院にして、古法眼の間あり、法主より頂經を賜る處あり。大客殿の裏なる、新らしき二階建は新寮と云ふ。祖書に東は天子が岳とあるは、書院と新寮の間より見ゆる山である。更に進み龍の間の前に二階建の見ゆるは、即祖山學院中等部の教場である。這入つて右に一段底い所は祖山學院生同窓會の圖書館にして、卒業者紀念寫眞、名士の筆蹟、及び諸雜誌新聞等を備へ付けてある。法喜堂を出て、黒門を下れば二王門即ち三門である、宗祖御在世の御草庵及び御廟所八角堂は山門より四町西にあり。若し行學院日朝上人の廟へ詣らむとせば庫裡浴場の下を、東して右に降れば數町にして到る。

本化妙宗の信行

赤 島 潮 旭

信心とは如何なるものか？と問へば、大乘法苑義林には『信とは信順の義なり』又大四教義には『信心とは隨順を義となす』と説く如く、信心とは順ふと云ふ意味で、換言すれば自己没却して一点の疑惑を挟まぬと云ふ事である。されば法華經提婆達多品には『淨心に心敬して、疑惑を生ぜざらんものは、地獄餓鬼畜生に墮ちずして、十方の佛前に生せん』と説かれたり。然らば其の心的狀態如何といふに、吾人は宜敷く境心一如するに外ならず、即ち人間以上の力、肝心の對境たる本門の本尊、其れに心を打任せて、聊かも疑念を生じなかつたならば、こゝに無限の希望と、絶大の力を生ずるのである。

さて人生の歸着を正當に欲求願樂する所の宗教即ち本化妙宗の正境は、先に述べた本門の本尊である事を知つたならば、其の本尊に對する場合、

心の奥底を傾けた、根本心で信じたなら、其刹那に於て、きつと靈光薰被するのである。

聖祖大聖人が北海の寒山、佐渡が島、萬字巴と降り積む雪の中に、確然たる大安心を得て、如説修行されたる、奮闘的精神も、皆釋尊の金言を少しも疑はず、堅く法經華に信を置かれたからである。

元來佛の大智慧、大慈悲が、すでに法界の根本心である以上、我等の正信もまた是と同一線ならざるべからず、故に佛の心を通じて、法界の眞際に歸入せんとするのが、我等の起信立行の目的なれば、其の根本心的發動に非ざれば、佛に接觸する事は甚だ至難である、我等は肉体欲本位といふ劣等の、心的狀態を超越した、眞心即ち心の底本を拓いて、其の眞面目を發揮し、以て佛の大智慧や大慈悲の靈線を接繋したのである。

既に本化妙宗の信を述べたる以上は、本化妙宗の行を知らずんばあるべからず、その行とは即ち純宗教的行、處世化せる行の二者にして、前者

を修行と目し後者を願業とする。今前者の修行の事を敍べんに、其行は一々法界の眞理に適合し正道にかあつたものに非ざれば、佛の本意に符合せんのである。大體佛の本意は人に最上の道を與へ最上の樂を得せしめんといふに在る。即ち無上の眞理たる法華經に安住して其の教意に則つて人生を經營すること、人間の身を以つて佛の事を行ふ即身成佛之である。是くの如く佛は元々一切衆生に佛の樂を與へたい爲に、佛自身が因果の骨髓を留めて經教に残し、其れを末世の衆生に信受奉行させて其目的を叶はしめたいと云ふのであるから、若しも之を行ずるものは直ちに如來の所作を行ずる事になるのである。然らば其の行とは如何なる至難のものかと云へば、只『南無妙法蓮華經』と唱へることである。尤も身、口、意、三業別々であく、相應じて一如一致して唱へるのである。この三業一如した所に三大秘法が人間の聲に化して所作と現するのである。

そして三業受持の行軌とは、意に念じ口に唱へ

身に行ふ事で、甚だ簡單である。其の所行の体は只南無妙法蓮華經の七字であつて、それを本尊としたのが、本門の本尊、其れを所行したのが本門の題目、其れを能行したのが本門の戒壇である。この三大秘法を一言に云ひ一言に持つて、それで佛法のあらゆる行法功德を積んだよりも以上、幾百千層倍勝れてゐる大功徳となるは、所依の法が勝れて居るのと、行法其のものが正しく根本的であるからである。

是の故に智有らん者、此功德の利を聞いて、我が滅度の後に於て斯經を受持すべし。是人佛道に於て決定して疑有ること無けん云々。されば末代の凡夫にして、固有の佛性をそなふる我等は、怠轉なく如說修行して佛の大慈大悲の弘誓の舟に乗り、到於彼岸の妙果を得て即身成佛の大願をはたすべきあり。



たどりし路

宮

南

吾の暫し躊躇ひしは、
友と別れむ三筋路、
一ツの路は平々坦々砥の如く、
風なぞ果てし海にも似たり、
一ツの路は晝なほ暗き八幡簀、
漸くにしてその奥に、
迷ひし吾は今醒めたり、
一ツの路はいとも崎嶇しき石の山、
一步一端その巔に吾は攀ぢぬ。

行けども山また山、
長く歩みし平の路には、
凡人彌生の花開き、
月の光さはやかに、

朝夕晝の太陽の光、
曲線もて投じ來る美しき影、
甘き香、
温い柔かな風、
吾れ僥倖に戻りもせて。
われは行かむ、
この高き石山の巔、
あはれ此にこそ、
なほ吾を活かす路はあらめ、
我が願は理論にもあらず、
夢にても、幻にても、自覺にても、
よし足には血ながるとも、
息の續かむその限りは、
一步一步を實行に。

(をばり)

—五、三、五—



同窓會記事

會則に基づき、四月二十三日定期大會を開く。會員百餘名は洩れ無く出席せり。幹事の開會の辭に次いで、吉田教授を議長に藤田教授を副議長に推せり。

次に泉會計の決算報告あり。次に幹事提出、及び一般會員提出議案を逐條審議せり。本回の決議に依て、會則に改正をなしたる點甚だ多く、各部細則の如きは、殆ど全部を訂正せりと云ふを得べし。

各部々長。従前のまゝ繼續せらる。次に幹事改選の結果、

(高等部二名)

泉 義 敬 會 計

森 亮 遠 講演部

(中等部二名)

藤 田 圓 海 文學部

佐 藤 秀 温 運動部

當選せり。議事全く終る時、既に五時過ぎ。開會より約十時間にして閉會を告げたり。

り。其間會員は熱心に討論推究して、本會の維持發展を希望せり。

講演部

○大正五年度の大會で、我が講演部の事業は更に擴大せられた。説教練磨部の新設は乃ちそれである。會員は毎週水、土の両日は必ず出席して樂説辯を練つて居る。何處の練磨部にも、幹事の尤も苦心するは欠席の防遏策であるが、進んで自ら熱心なる我が會員は、眞面目に規約を結んで出席を盟ひ、怠慢者に對する制裁法をも規定された。大會席上最も注意を喚んだ賞罰令が之に適用されるのである。如是にして更に積功せんか、我が誇るべき講演部は、更に一段と光彩を放つべけん。

○實地練磨の方に、清心公堂の例月布教を加へる事となつて、四月以來之に出張する。之で實地布教場は五箇所となつた譯である。次に從來は個人として、他の公開布教に招聘されることを許して居たが、本部の發展上支障ありとして之を嚴禁した。そして公開場に選出さるべき辯士の資格も、

高等部に限る事としたのも、自然の勢である。今前號に續いて其の主なるものを抄録すれば、

一、降誕會講演

例年の經驗に依て技巧を増せる各級敬場裝飾の縦覽者は、歎美の聲も盡きあへず押され押されて講演場たる本師堂に入る。實に稀有の盛會なりき。

開會の辭 森 幹事

我是世尊便 藤 田 教授

誕生の意義 吉 田 教授

一大事因緣 森 田 教頭

恰も本年は、舊御當會の式と同日なりとを以て、該御式始まるや、多く退座の止むなきに臻りしと、森田教頭の支障ありて登壇せられざりとは甚だ遺憾なりし。

一、幻燈會 二月十八日、西八代郡

久那土村小學校に於て、同十九日、同村法

圓寺に於て、何れも幻燈布教をなせり。辯

士早川玄頂君、田附教授。

一、幻燈布教 二月二十日、大野山本

遠寺に於て、地方青年の爲めに、辯士早川

森、松木、今村、岡の五君。

一、幻燈布教 三月二十一日、西八代郡岩間村大乘寺にて開會、票數、小林兩辯士出張。

一、幻燈布教 三月二十六日は、隆源蓮師御命日なるを以て、上ノ山圓光庵に於て遠來信徒の爲めに、同師御傳畫及宗祖御傳映寫、辯士森、松木兩君。

一、説教幻燈 四月十八日、妙石坊の二神祭に於て、前講森、後座藤田教授、終つて幻燈布教は、岡、松木、森、溝田の諸君。遠近信徒満堂の盛況なりき。

一、法話 四月十九日、本行坊參籠團體の爲めに、泉、菊池兩君出張一場の法話をなす。

一、幻燈布教 同日、大乘坊信徒の請に赴く。辯士草川、藤田、今村の諸君。

一、説教 四月二十三日、願滿稻荷祭典に就き、早川、溝田、菊池君等出張、夜半に至るまで聴者敢て倦まず。

一、建宗紀念會 四月二十八日快晴！數年來企劃しつゝ、年々雨に障へられし、奥

之院思親閣上に於ける建宗祝賀會は、遙か房州の岬を掌に指すが如き快晴を得て、實行することを得たり。先之、本院に於て報恩會を修し、勇步登攀せる百餘の健兒が到着を待つて、礼堂開扉讀經、了つて直に感想演說會に移る。吉田教授の開會の辭に因みて、建宗聖日に三月四月同説有るの考證的講演あり。次で各級の豫定を畧して、中等部總代今村練志君、高等部同丸山勝龍君の演說あり。最後に森幹事登壇して、茲に演說會を閉つ。千時零時半。庫裡に於て午餐を喫し、茶話會に支度せる菓子包を頒ちて散會す。

一、奥之院通夜説教 疇昔已來三月開宗説を守る奥之院にては、舊曆相當の四月二十九日より開宗會を修す。同夜の御通夜には、早川、泉、松木、菊池等諸君登高座。

一、大會幻燈 例年の通り、五月七日本院に於て釋尊宗祖御傳幻燈會を開く。同八日懇請ありて、特に宗祖のみ映寫講話せり。參詣者兩夜とも我が本師堂に溢るゝが

如し。因に役配、辯士に溝田、藤岡、松木、菊池、平原、岡、(以上釋尊)早川、泉、森、安積、小坂田、辻、川口、(以上宗祖)技師に藤田、佐藤二君中等部三年級充之。

一、幻燈布教 五月十七日、例年の如く發診堂開扉會に就て幻燈開演。早川、松木、辻、岡等の辯士出張。

一、幻燈布教 四月二十六日、西八代郡大河内村信徒某宅に於ては、聖祖當時の緣由によりて、年々千部經會を勤めつゝあるが、屢請によりて、早川、泉、安積君等出張。

一、一ノ瀬の布教 中巨摩郡野々瀬村一ノ瀬妙了寺千部會は、殷賑最も有名なり。本部は辯士松木、森、早川の三名を派し。藤田部長統卒の下に、四月八日同寺境内に於て屋外講演をなす。同夜加茂君等の應援を得て幻燈布教をなし効果頗る大なるを得たり。

■ 文學部

當部は定期大會に於て、一大發展の曙光を認めたりと云ふべし。即ち雜誌縱覽所には、同所規則なるもの規定せられ、一般會員が雜誌を縱覽するに整然たる規則に依つて閱讀し、嚴正なる態度を以て讀書し得べく、而して吾人は、會員の參々伍々間斷なく縱覽所に入つて、思想を練りつゝあるを喜ぶ。

本部の一大事業である雜誌「棲神」は、從來志望者の投稿せしに止まりしも、會則は改正に依りて、全會員は等しく投稿の義務ある事と定めらる。

然れども頁數に限りある「棲神」なれば會員の投稿の全部を掲載する事不可能なりとす。故に應募の中よりその優秀なるものを擇び、之を「棲神」に掲載し、其餘は「棲神別卷」と題して、之に優美なる裝釘を加へて縱覽所へ備へ付くることとせり。

故に會員諸君、拙文なりなど、遠慮すること勿れ。即ち「轉んでも只は起きぬ」云ふ事に着目せられ、益々文想を練磨せられよ。

れよ。

「本部を、同窓會出版部と號し、書籍出版をなす事あり」の項目により、不日吉田教授の「本尊論史綱」を出版すべし。

かくの如くして我が文學部は、日に月に進步發展とつゝあり。會員諸君よ！吾等が近き將來に在つて、三寸の舌頭を以てよく群機を導くも、其の聲たるや數里離れて聞くを得ず、一分時の後に耳にする能はず。然らば諸賢、試みに文書傳道を以てせんか、世は文明にして活字あり、一たび活版を以てせんか、其の廣きこゝ滿天下に行き渡り、其の永き時盡未來際に及ばん。本化の教風を宣揚する、須らく之に倚らざるべからず。一大覺醒を促す、それ亦快ならずや。勉めよ諸賢！（F E 生）

■ 運動部

當部は日に月に發展し來り、一昨年及び昨年には、弓術新設の議案も提出せられしが、財政上止むなく現状維持と云ふ事に終りしが、今年四月二十三日の大會に於て、

熱心なる會員より、再び弓術新設の議案提出せられ、幸ひに是れが新設と決定せらる。

依つて大弓三挺並に附屬品等を設備せり。茲に於て理想的の弓術の場所を新設すると同時に、從來の運動場の狹きを感じ、百有餘名の熱心なる會員の盡力に依つて新たに二十餘坪の平地を作り、加ふるに、金棒、ブランコ、遊動木等の修繕をなし、漸くにして稍完全なる運動場とはなれり。

○大正五年五月二十五日より、會則第七條に準じ、四泊五日間にて伊豆聖跡參拜を目的とし、傍ら道路布教を兼ねて修學旅行を行へり。折しも途中に於て風雨の爲め、五泊六日間となれり。（同記事は別項に録す。）（S S 生）

■ 豆州靈跡參拜記

綠樹鬱蒼翠色正に滴た、らんとする阜月下旬の頃、吾祖山の健兒廿三名は、龜口、藤田兩教授引卒の下に、聖祖四箇之大難の一たる伊豆伊東聖跡參拜を爲す。

其の旅程概要左の如し。

□二十五日。風雨。

三時起床。夜來の雨小止みとなり居れるを以て、一行廿五名祖堂前に集合。龜口教授導師の下に、一行道中無事ならん事を祈誓し。次いで引卒教師より、旅行に關する注意等終りて、懐かしき樓神閣を後にせしは五時なりき。隊伍肅々路を大野に執りて進むに、且し小止みとなりし夜來の雨は、再び強雨となり風さへ加はりて、一行の困難譬ふるにもなく、漸くにして大野乗船場へ着す。時正に六時。一茶店に憩ひ各自乗船の用意を爲し、待つ事須臾にして、七時漸く大野を出船し、岩本に向ふて進行するに、風雨益々甚だしく、合羽以て包まれたる船中談話も容易に通ぜず、只濁流の両舷に激する音と、暴れ狂ふ風雨の覆ひたる合羽を甚だしく煽る音とを聞くのみなり。船の進むに従つて、天候益々險惡となり船体の操從意の如くならず、逆上する事數回。道が川慣れし船夫も、遂に、到底目的地运行く事の不可能を訴へ來る。乍然一行

は皆是れ法華經の行者、此時こそ座を正し、藤田教授の所持せる、海中災難除げの御守を船首に安置し、其の加護を請ふ事切なりと雖も、未だ其驗無し。噫天何ぞそれ我行を憐まざるの甚だしき。詮方無く辛うじて南部に着船し旅館錢屋へ投宿す。時に十一時十五分なりき。

晝食後半日は空しく過ぎて、夕方に至れば、風雨漸く止みて外出する者も數多く、聽て入浴后夕食も終れば、各自明日の天候を氣遣ひつゝ、寢に就く。此日祖山を去る僅かに三里にして、此處に宿する一行の本意に非ざるも、天候の爲なれば詮方無し。

(蘆洲)

□二十六日。快晴。

三時半起床。昨日の風雨に反し、今日は空晴れて風も無く、一行の喜び云ふ計り無し。四時三十分旅館を發し、直ちに船に乗す。昨日の雨に水量増して、船足疾き事矢の如く、波荒うして船端を越してはドツと一同の頭上に浴せらるゝ毎に、ワツと鯨波を擧るも面白う、船の進むをも知らざる間

に、早くも岩本の岸に着船す。時に七時五

十分。直ちに實相寺に參詣す。總門に至れば、安國道場と書せる大額掛かれり。往年

宗祖入藏の靈地かと思へば、何と無う頭の下る心地す。法主親ら我が行を迎へ、開帳

等の勞を執らせ給ひ、本堂祖師堂等を參拜後、經藏に詣す。藏中々央には、中老日法

上人作宗祖の尊像並に御分骨を安置す。其外寶物數多かりき。其の重なる物左の如し。

一、抹香宗祖の尊像。一、大黑天。

一、女体大黑天。一、大日如來の像。

一、傳大士。

初めの一を除く外、皆宗祖當時より傳はる物なれども、彩色を施し、形を變ゆ等は惜しき事なり。藏の入口に藏經有り雖も、宗祖當時の物は皆四散して只四冊のみ、此處に積み在るは皆后年の物なりと云ふ。經藏の上に情今鑑師隱棲の地在り。眺望絶佳。傍らに經藏守護の天満宮を祀る。降りて庫裡の裏手に、宗祖安國論御著述の硯、使用硯水の井在り、清泉を湛ふ。庫裡に入りて更に寶物を拜觀す。

一、宗祖御眞筆本尊一幅——了義達師鑑定書付。

一、宗祖御手入唐本藏經殘本四冊。

一、一部七卷法華經。

一、智證大師所傳文殊普賢並二王尊像。

一、向尊書寫、大田殿御消息。

一、開祖源師筆、本尊問答抄。

此の外源師改宗當時の法器等も有りき。

是等を拜觀して後、喫茶晝食後十一時同寺

を出で富士驛に向ふ。午后零時十三分同驛

を發し、幾つかのステーションを経て、三

島驛にて駿豆線に乗り換へ三島町着。一時

卅分。直ちに行學朝師得道の靈地たる本覺

寺に詣で、序で三島神社へ行く。神社には

常代主命を祀る。群鳩鳴いて餌を乞ふも可

愛ゆく、唐門前の池中には、多くの鯉養ひ

ありて一行中のケイ君、餌を買ふて與ふれ

ば、大小數百匹小山の如くなりて争ひ食す

るも面白く、且し憩ひて後、二時四十分同

所を發して玉澤に向ふ。途中、初夏の日光

は横様に一行を照り付け暑き事限り無く、

漸くにして四時卅分玉澤妙法華寺に着す。

同寺には既に山内山外の寺悉く集まりて我が行を待つありき。直ちに本堂に詣で、讀經後内靈寶を拜觀す。其の中重なる者左の如し。

一、傳法正嫡之大曼陀羅。

一、宗祖の御肉齒。

一、日照尊者御親刻立像の釋尊。

是れ等の三ツは、當山第一の、三箇の重寶に於て、このほか、宗祖御眞筆類として

は、

一、八日堂祈禱本尊。一、註法華經（開經並一二四六）。一、撰時抄（一二三四五）。

一、兄弟抄。

等有り。此外更に、

一、照尊染筆法華經一部。一、興師所寫安國論。一、宗祖御親刻大黑天。一、宗祖御使用珠數。一、宗祖御使用木杯（臺附）。

一、宗祖御小使錢殘餘（祥符通寶）。

等有り。此外更に掛軸數十幅有りしと雖も、記するに暇無かりき。拜觀後、宗祖並

照師以下歷代の御墓及び大田家代々の墓等に詣で、後、山内山外各寺院の厚き心配に

預り、入浴夕餐後、泊り合せたる信者等の爲めに森幹事一場の講演を爲し、序で室伏日定師より玉澤萬代式目拜讀下されて後十一時就寢す。（秀月）

□二十七日。午前晴午后雨。

五時起床。朝勤經並に朝餐も終りて後、監督室伏日定師の先導にて書院を拜觀して

後、特に同寺より案内者として付けられし室伏見清師を先導として、同寺を辭せしは

六時半なりき。里程約そ二里餘にして、八

時四十分葦山城趾近き江川家に着す。同家は保元の頃大和宅野より移住し、宗祖伊豆

流罪以後は代々法花經の信者にして、今に

宗祖御染筆火防の曼陀羅有り云ふ。當主

英武氏の挨拶有りて、生き柱の因縁等細密

なる説明ありき。尙同家に我國鑄造初期の

大砲を藏す。同家を辭し本立寺に詣す。當

寺は江川太郎左衛門の建立にして、得度し

て日龜と號し、此處に餘生を送りしなりと

傳ふ。小憩喫茶後十時同寺を發し、葦山城

趾を横切り蛭ヶ小島の舊跡を右に眺め、嘉

永年間江川英龍公の築造にして、安政年間

盛に大砲を鑄造せし所なりと云ふ。反射爐跡に着せしに折しもあれ、朝來暗れ居たる空は忽曇り來り雨さへ降り來り、一行の心中推し量られて哀れなり。同所を發し田中山峠にかゝる頃、雨は益々強うなり來り、空腹は感ずる、最早一步も進む能はず、幸ひにして一茅屋を見付け、此處に憩ふて、本立寺より頂戴し來れる結飯を食して飢を凌ぎ、午后零時十五分再び同所を發して、宇佐美に向ふに雨は益々降り來る中、山又山の細道を四里の間歩み、漸くにして三時四十分宇佐美に着し、此處より一同馬車に乘らんと欲すれども馬車無きを如何せん。漸く馬車二臺に足弱き者のみを乗せ、他は更に雨を浸して伊東に向ふ。途中にて、伊東町の女人構、並に二三寺院方の出迎を受け、旅館元猪戸へ着せしは五時半なりき。馬車に乗ぜしは、後る、事一時間にして着す。同夜藤田教授、並ひに森、菊池兩兄は中村長次郎氏別宅に趣き、講演する所有りき。演題左の如し。(辻 蘆洲)

開會の辭 波木井寛二師

釋尊出世の本懷

菊地泰旭君

道

森亮遠君

靈跡參拜所感

藤田教師

回二十八日。曇。

五時起床。七時五十分旅館を發し、前田龜吉氏宅、並ひに山田平三郎氏宅へ立ち寄り、過日來、一方ならぬ心配に預りし御禮を爲して後、佛光寺に詣ず。同寺は伊東朝高の家數跡にして、境内に伊東朝高及び綾部正清の墓在りき。同寺に小憩茶菓饗應に預りて後佛現寺に詣ず。時に九時半。同寺は伊東朝高病氣平癒の御禮として、弘長元年六月十三日(若くは十七日と)建立して、宗祖に上りしものにして、後三ヶ年間宗祖御起居の所なりと云ふ。此處にて記念撮影を爲して後、更に妙照寺へ參詣す。天狗の詭狀有り。更に同寺を發し、淨の池に鯉を見、元猪戸旅館に歸りしは十一時三十分。晝食を終りて後、午後一時半旅館を發し、一行に加ふるに信者五六名と共に、前田龜吉氏の寄附せられしモーターボート妙吉丸に乘じ、伊東を發して篠ヶ浦に向ふ。時に二

時。寶鏡の如き海上、近くは初島手石島、遠くは水天一碧の間に大島、利島、等島等を眺めやらる。左手に扇山の鹽吹き岩與望島等を眺めて進むに、多くの小舟の鰯浦の網を兄張り居るなど、身延の山中に住む一行にはながく珍しく、漸く一里半も進みし頃、龜口教授導師の下に讀經、小石に題目並に改名を書せるを海中に投じ、以て前田家の先祖を吊ふ。三時四十分、一行無事篠ヶ浦に着し、直ちに蓮着寺に詣て、次で同奥之院に參詣す。堂の直ぐ前は所謂鋸岩の靈跡にして、何十丈となき斷崖絶壁にして、それを去る一町程沖には、宗祖の置き去りにされしと傳ふ鋸岩在りと聞く。不幸満潮にて拜する事能はず。嗚呼今は斯くして、易々と參拜し得るも、六百餘年の昔を思へば、轉だ感涙を催さざるを得ず。辭して蓮着寺にかへり、小憩喫茶後再び船に乘じ河奈に引返へす。船守の岩屋に着したるは六時半なりき。岩屋より上る事町餘にして蓮慶寺在り。暮色漸く迫り來れば、急ぎ參詣して直ちに乘船歸路に着く。遠く近く小舟

の點々として、體聲も勇しく歸り來るも面白し。七時二十分漸く伊東に着すれば、既に信者の方々の出迎ひに來るあり。港中には水雷艇白露の停泊せるありき。旅館へ歸着せしは七時二十分。時に朝來曇りたる空よりは、雨のホツリ／＼と降り來るありしが、須臾にして止めば、夕食後、龜口、藤田兩教授並ひに、高等部生、森、松木、菊池、兄等三名は、昨夜の講演會場に赴き、波木井寛二師開會の辭の下に、

日蓮上人の宗旨 菊池泰旭君

理想の宗教 松木本興君

是菩薩道 森亮遠君

日蓮主義 藤田教授

未定 龜口教授

等の演題の下に講演有り。其の他は全員を二隊に分ち、道路布教を爲しき。十一時半一同旅館に歸り就床す。(秋月生)

○二十九日。午前曇午後晴。

六時三十分起床。天候餘り面白からず。雖も、左程の事も無ければ出て出發の準備を爲し、九時多數信徒見返りの中に旅館を

出發して、朝高寺へ參拜す。酒肴等の饗應に預りて後同寺を發し、途中まで同寺住職の見返りを忝うし、柏峠も身延鍛への足には何のその、午後一時冷川福井旅館に着し、晝食を終へて後、一時半馬車五臺に分乘し同所を立つて修善寺に向ふ。三時五十分修善寺に着、大急ぎで修善寺及び町の一部を見物し、直ちに大仁へ引返し五時二十分大仁驛發、三島、富士驛等にて乗換を爲し、大宮驛着八時。直ちに海松樓に投宿す。(蘆洲)

○三十日。晴。

四時起床。五時三十二分大宮驛を發し、六時芝川着。汽車を捨て、内房まで步行。約一時間にして本成寺へ着す。本堂祖師堂等參拜後、寶藏を拜觀す。宗祖、並日遠上人、元政上人の詠歌を初め、先師の本尊並に書物等數多かりき。寶物を拜觀して、故島教師の墓に詣ず。庫裡に入りて小憩後、五六名の馬車に乗せし外、步行にて九時三十分萬澤着。一行馬車に乗る豫定なりしも、馬車無く、漸く二臺に十二名乗せし外、南部まで殆んど駆足にて十一時半妙淨寺に着

す。馬車は遅る、事一時間半にして漸く着す。同寺にて晝食後、午後二時南部を出發し、途中櫻清水の靈跡に參拜し、四時半相又止慶寺着、約三十分間休憩後再び同寺を發し、懷しき棲神閣前に着。讀經以て無事歸山を宗祖に御報告申し上げ、萬歳を三唱し散會したるは五時半なりき。

省れば、我等が此度の行、宗祖法華色讀の妙地たる伊豆靈跡參拜を遂げ、以て六百有餘年前の宗祖の御艱難を思ふにつけ、吾人の精神は益々堅うなるのみ。終りに臨み、旅行中到的所寺院及び信者方の熱誠なる御歡待に預りしを深謝して止まず。特に、

一金五圓也

岩本實相寺殿

一金五圓也

玉澤妙法華寺殿

一金壹圓也

内房本成寺殿

一、辨當

葦山本立寺殿、内房本成寺殿南部妙淨寺殿

一、菓子

伊東町藤田專吉殿

一、酒肴

伊東町湖光寺殿、同山田平三郎殿

一石油發動機船一隻 伊東町前田龜吉殿等には特別なる御心配相掛け深謝の外なし。(松木秀月)

飯井野御牧

吉田 素恩

『松野殿女房御返事』及び『簡御器鈔』等の、所謂『三箇郷』に就いて、泰室居士、縮刷の編者、『身延山御書類聚』の編者等、凡そ近世に在つて、祖書を編纂する者は、殆んど一致して、

飯井野イキノ或は飯野オホノ

御牧ミマキ

波木井ハキリ

を、三箇郷のそれと爲し、又『語式』五四十六に

南部ノ六郎實長。法名日圓。飯野。御牧。波木井。三箇の郷を領して。波木井に居住ありければ。波木井殿とも申す也。

と云ひ、啓蒙二十九六十九之を採用して、

飯野之御三ヶ郷ノ内波木井

とある。古寫本を斥つて居る。

然るに、古寫本及び板行の録内外、並に『身延山記』、即ち『身延山御書類聚』の第一板、第二板には、皆

甲斐國或は甲州飯井野或は飯野御牧三箇郷ノ内波木井

とありて、『飯井野御牧』と『三箇郷』との間に、『波木井』の三字が缺けてゐる。

さて、吾祖が御在延當時、及びその前後に於ける、當地方の地理地名に關して、自分が私に疑を懷いたのは、決して昨今のことではない。而も爾來魔障の爲めに、常に之が研究を果し得をかつたのは、誠に殘念千萬である。然るに頃者因縁和合。甲斐國の古地名に關する『古記録』を某所に在つて閱することを得、之を『甲斐國誌』卷之一、二に對照するに及んで、這個の疑問は、稍解決の門戸が發見せられたやうな氣がする。

蓋し建治弘安年代にありては、現今の南巨摩郡富士川沿岸の地古、西川落と云ひ、後西河内に作る。を四大部落に分ち、その最北部は、現中巨摩郡大井村より、鵜澤町、(南巨摩郡)黒澤村(西八代郡)に至る一帯にして、

之を大井ノ庄と云ひ、庄司は興師の父橋光長にして、歟澤光宅のありし處である。統長寺、即ち今の蓮華寺は、當時その第「國誌」「寺記」。最南部は、現今の光子澤南巨摩郡豊岡

より、萬澤に至る一帯にして、之を南部の御牧と云ひ、領主は實長公の父南部三郎光行下山は下山ノ庄庄司は、今其の南は波木井、飯井野、大野の梅平を通じて、飯井野御牧と呼んだのである。

『古記』に依るに、御牧ミマキとは御牧場の畧稱、即ち今の言葉で云はば、御料牧場である。甲斐には、

古代黒駒今の東八代郡御牧ありて、朝廷御料の馬を飼育し、飯井野、南部も亦、早くからその養育場であつた。

『御』の一字を冠する譯は、朝廷の御用馬を飼養するからである。而して建治弘安年代に及んでは、本來の地名である。黒駒、南部、飯井野の下に、各御牧の二字を添え、かくて黒駒御牧、南部御牧、飯井野御牧、となへ、『御牧』を全く當時の『庄』と同一意に使用したやうである。

即ち宗祖當時、富水沿岸の地が、

大井ノ庄、

下山ノ庄、

飯井野御牧、

南部御牧、

と、政治地理的に、區劃せられてあつた今の歟澤富以北を以何に呼ばれたかは、全く記録の徴すべきものが無いから、知る由が無い。ことは、史實である。

『松野殿女房御返事』、『簡御器鈔』、ともに御聖筆の今に傳はるものが無いから、直ちにかうだと斷案は下し難いが、然し此等兩書の古寫本に、皆

飯井野御牧ノ三箇郷之内波木井

と記載しあれば、蓋し『三箇郷』とは、今の

大野、飯井野と飯野とは同一にして、今の大野の名

梅平、相又に關しては、祖書の中別に

波木井、

を指し、又『古代地名錄』『甲斐國誌』等、皆前述の如ければ、現行の大本、縮刷遺文、及び『御書類聚』等の如く、『御牧』を以て、大野、波木井、と同じく、一部落の名稱と見るは、少しく無理である。

要するに、相師、講師、泰堂氏、及び故島兄等

が、古寫本、現行録内外、乃至『身延山記』初再板等の、

甲斐國飯井野御牧三箇郷ノ内波木井、の文を、

甲斐國飯野。御牧。波木井。三箇郷ノ内波木井。

と書き代へ、若しくは書き代へた方がよしの説は、恐く考へものだらう。

以上述べたやうな次第で、自分は現行の『遺文録』等よりは、寧ろ古寫本、及び現行の『録内外』を以て、善しとする者である。

——大正五年六月四日夜半——



大正五年九月十二日印刷
大正五年九月十五日發行

編輯人

吉

田

素

恩

山梨縣南巨摩郡身延村

發行人

藤

田

圓

海

山梨縣南巨摩郡身延村

印刷人

依

田

真

明

山梨縣 鯉澤町 本町

印刷所

古

久

紋

印刷所

山梨縣 鯉澤町 本町

電話二三番

山梨縣南巨摩郡身延村

發行所

祖山學院同窓會

■ 目 書 版 出 院 學 山 祖 ■

集 募 約 豫

■ 妙宗諸師述作目錄

豫定價金貳拾錢位

近刊

■ 本尊法牀論議變遷史綱

豫定價金貳拾錢位

近刊

■ 醒悟園叢書卷貳

著 作 集

特製 上製

本妙律師遺編

■ 高祖遺文錄解題

天鼓社發賣

■ 本尊論資料

（第貳相傳）
定價金五拾錢

■ 祖書鑽仰

總金クロース菊版
定價文字入美圓裝

京東座口替振
番四二八〇一

部 版 出 會 窓 同 院 學 山 祖

郡摩巨南縣梨山
村 延 身

脉山學刊出版書目

藥味藥

■ 效宗精補血汁目錄

藥宗金類餘錄
正 肝

■ 本林 補精變血汁

藥宗金類餘錄
正 肝

■ 顯計園叢書

本姓華補血錄

卷 頂
正 肝

■ 高脈靈文雜報

天雄振發寶

■ 本尊齋寶林

藥宗金類餘錄
正 肝

■ 脉書

藥宗金類餘錄
正 肝